

堂原遺跡



堂原遺跡

二〇〇九年三月
鹿児島県立埋蔵文化財センター

2009年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



遺 跡 全 景



① 波板状痕跡完掘状況 ② 道跡検出状況

序 文

この報告書は、国道504号改良事業工事（百引拡幅）に伴って、平成18年5月から8月までの3か月間にかけて実施した堂原遺跡の発掘調査の記録です。

堂原遺跡は、鹿屋市（旧輝北町）に所在し、標高300mを超えるシラス台地上に位置する遺跡です。

遺跡からは、縄文時代、古代、中世の遺構や遺物が発見され、時代の移り変わりを示す良好な資料を得ることができました。

中でも、多数発見された道跡は、古代～中世の遺跡環境を示す資料として貴重な情報を得ることができました。

本報告書が、県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査に当たり御協力いただいた県土木部、旧輝北町教育委員会、及び発掘調査に従事されました地域の方々に厚く御礼申し上げます。

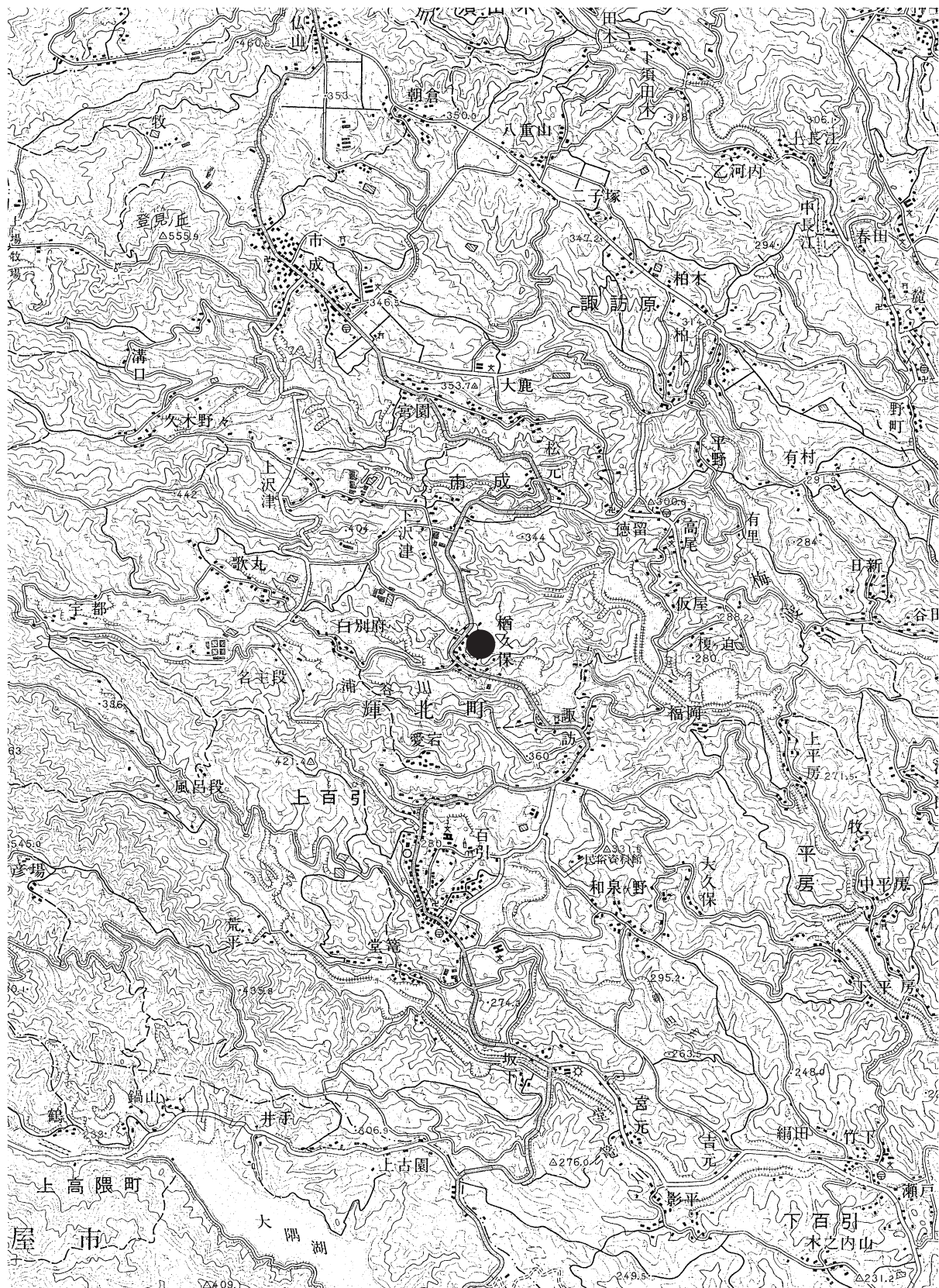
平成21年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 宮原 景信

報告書抄録

ふ り が な	どうはらいせき							
書 名	堂 原 遺 跡							
副 書 名	国道504号改良工事（拡幅工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第145集							
編 著 者 名	小林晋也・川口雅之							
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒899 - 4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号 0995 - 48 - 5811							
発 行 年 月 日	2009年 3 月							
ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふ り が な 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号		東 経	北 緯	調査期間	調査面積 ㎡	調 査 原 因
どうはらいせき 堂原遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かのやし 鹿屋市 きほくちょう 輝北町 かみもびき 上百引	46203	64・37・0	130 ° 49 ' 36 "	31 ° 23 ' 19 "	20050105・ 20050126 20060515・ 20060811	3 ,700	国道504号改良 工事
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
堂原遺跡	散布地	縄文時代早期	炉跡 4 基 集石 3 基	岩本式土器 , 前平 式土器 加栗山式土器 , 吉 田式土器 , 桑ノ丸 式土器 , 磨石 石斧 剥片				
		古代～中世	道跡58条 溝状遺構17条 土坑 1 基	土師器 鉄製品		近隣を結ぶ当時の幹線道 路として利用された道跡 群を検出。		
概 要	縄文時代早期の調査では、台地の落ち際に炉跡が 4 基、集石が 3 基検出された。土器は岩本式土器、前平式土器、桑ノ丸式土器等が、石器は、石斧、磨石、石皿が出土した。遺構・遺物が少なく、また住居跡が発見されていないことから、短期間の逗留によって形成された生活跡と考えられる。 古代・中世の調査では、道跡58条と溝状遺構が17条検出された。特に道跡は、大きく道跡群として 3 群に分けられ、同一方向へ80m以上検出された。当時の市成 - 上百引間を結ぶ交通の要衝として利用されていた可能性もある。							



堂原遺跡位置図(1 : 50, 000)

例 言

- 1 本書は、国道504号改良工事に伴う堂原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県鹿屋市輝北町上百引に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、県土木部から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、平成18年5月15日から平成18年8月11日まで実施し、整理作業・報告書作成は平成20年度に実施した。
- 5 遺物番号は、通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、県土木部が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面作成・写真撮影は、調査担当者が行った。空中写真撮影は有限会社ふじたに委託した。
- 9 遺構実測図のトレースは、小林晋也・川口雅之が行った。
- 10 土器・石器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て小林・川口が行った。
- 11 遺構内から採取した資料の化学分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 12 遺物の写真撮影は、吉岡康弘が行った。
- 13 本書の編集は、小林・川口が担当し、執筆の分担は次のとおりである。
第 Ⅰ 章、第 Ⅱ 章第1・2・4節、第 Ⅲ 章（古代・中世）小林
第 Ⅳ 章第3節、第 Ⅴ 章（縄文時代早期）川口
- 14 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、堂原遺跡の遺物注記の略号は「DH」である。

目 次

序 文
報告書抄録
例 言
目 次

第 章 発掘調査の経過	1
第 1 節 確認調査の経緯	1
第 2 節 本調査の経緯	5
第 3 節 報告書作成事業の経緯	7
第 4 節 発掘調査および報告書作成事業従事者	7
第 章 遺跡の位置と環境	8
第 1 節 地理的環境	8
第 2 節 歴史的環境	8
第 章 発掘調査の概要	11
第 1 節 発掘調査の方法	11
第 2 節 層序	12
第 3 節 縄文時代の調査成果	15
1 調査の概要	15
2 遺構	15
(1) 集石	
(2) 炉跡	
3 遺物	18
(1) 土器	
(2) 石器	
第 4 節 古代・中世の調査成果	30
1 調査の概要	30
2 遺構	30
(1) 溝状遺構群	
(2) 道跡	
(3) 溝状遺構	
(4) 土坑	
3 遺物	45
(1) 土師器	
(2) 鉄器	
第 章 プラント・オパール分析	48
第 章 発掘調査のまとめ	52
写真図版	55

挿 図 目 次

第 1 図	確認調査トレンチ配置および本調査範囲図	4
第 2 図	周辺遺跡位置図	10
第 3 図	グリッド配置図	11
第 4 図	土層模式図	12
第 5 図	第 2 地点西側壁面土層断面図	13
第 6 図	第 2 地点南側壁面土層断面図	14
第 7 図	第 3 地点西側壁面土層断面図	14
第 8 図	第 3 地点縄文時代早期遺構配置図	16
第 9 図	集石 1 ～ 3 号	17
第10図	炉跡 1 ～ 4	19
第11図	第 3 地点縄文時代早期（ 層 ～ 層上面 ）遺物出土状況図	20
第12図	縄文時代早期土器 1	21
第13図	縄文時代早期土器 2	22
第14図	縄文時代早期土器 3	23
第15図	縄文時代早期土器 4	24
第16図	縄文時代前期土器	25
第17図	縄文時代早期石器 1	28
第18図	縄文時代早期石器 2	29
第19図	第 1 地点遺構配置図	30
第20図	第 2 地点遺構配置・遺物出土状況図	31
第21図	溝状遺構群 1	32
第22図	溝状遺構群 2	33
第23図	第 1 地点検出遺構（道跡 1 ， 2 ）	35
第24図	検出遺構（道跡 3 ～ 7 ）	36
第25図	検出遺構（道跡 8 ～ 14 ）	37
第26図	検出遺構（道跡15～25）	38
第27図	道跡 5 ～ 25断面	39
第28図	検出遺構（道跡26～49）	40
第29図	道跡11～43断面	41
第30図	検出遺構（道跡50～54）	42
第31図	道跡15～53断面	43
第32図	道跡30～58断面	43
第33図	検出遺構（道跡55～58）	44
第34図	検出遺構（溝状遺構）	46
第35図	古代・中世出土遺物	47
第36図	道跡 4 波板状痕跡検出状況	53

表 目 次

第 1 表	確認トレンチ調査の概要	3
第 2 表	周辺遺跡一覧表	9
第 3 表	基本土層	12
第 4 表	縄文時代早期土器層位別出土状況	18
第 5 表	縄文時代出土土器観察表	26
第 6 表	縄文時代出土石器観察表	27
第 7 表	古代・中世出土遺物観察表	47

図 版 目 次

図版 1	調査区全景	55
図版 2	第 3 地点西側壁面土層断面	56
	2 号トレンチ土層断面	
	P 13 堆積状況	
図版 3	A B - 20, 21 区 ・ a 層遺物出土状況(1)	57
	A B - 20, 21 区 ・ a 層遺物出土状況(2)	
	a 層土器出土状況(1)	
	a 層土器出土状況(2)	
	a 層石器出土状況(1)	
	a 層石器出土状況(2)	
図版 4	A B - 20, 21 区 b ・ 層遺物出土状況	58
	b ・ 層出土遺物(1)	
	b ・ 層出土遺物(2)	
	b ・ 層出土遺物(3)	
	先行トレンチ 1 調査状況	
図版 5	集石 1 号	59
	集石 2 号	
	集石 3 号	
図版 6	炉跡 1 ~ 3 検出状況	60
	炉跡 2 検出状況	
	炉跡 3 検出状況	
	炉跡 2 土層断面	
	炉跡 3 土層断面	
	炉跡 1 ~ 3 完掘状況	

図版 7	第 2 地点西側土層断面	61
	P 1 堆積状況	
	第 1 地点道跡・遺物出土状況	
図版 8	B C - 9 ~ 12区溝状遺構群検出状況	62
	B C - 9 ~ 12区溝状遺構群完掘状況	
図版 9	道跡 群 (B C - 2 ~ 7 区) 検出状況	63
	硬化面 (B C - 2 ~ 4 区) 検出状況	
図版10	道跡 群 (B - 6 ~ 8 区) 波板状痕跡検出状況	64
	道跡 群 (B - 6 ~ 8 区) 波板状痕跡完掘状況	
	道跡15波板状痕跡	
	道跡15断面状況(1)	
	道跡15断面状況(2)	
図版11	道跡 群 (B C - 9 , 10区) 検出状況	65
	道跡54断面状況	
	道跡56断面状況	
	道跡 群 (B C - 11 , 12区) 検出状況	
	道跡34断面状況	
	道跡35断面状況	
図版12	調査風景(1)	66
	調査風景(2)	
	市成中学校社会科見学の様子	
	百引小学校家庭教育学級の様子	
	発掘調査に携わった方々	
図版13	縄文時代早期土器 1	67
図版14	縄文時代早期土器 2	68
図版15	縄文時代早期土器 3 , 古代・中世土師器	69
図版16	縄文時代早期石器	70

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 確認調査の経緯

1 確認調査に至るまでの経過

鹿児島県土木部道路建設課は、国道504号改良事業に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育庁文化財課に照会した。事業予定地は周知の遺跡である堂原遺跡であることが明らかになったため、文化財課と道路建設課で協議した結果、対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することになった。

確認調査は、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下埋蔵文化財センター）が平成17年1月5日から1月26日（実働15日）に実施した。

2 確認調査の組織

平成16年度 確認調査

事業主体者	鹿児島県土木部（鹿屋土木事務所）		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	木 原 俊 孝
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次 長	賞 雅 彰
		調 査 課 長	新 東 晃 一
		課 長 補 佐	立 神 次 郎
		主任文化財主事兼調査第一課第一調査係長	
			池 畑 耕 一
		主任文化財主事	中 村 耕 治
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文 化 財 主 事	廣 栄 次
		文化財研究員	横 手 浩二郎
		文化財研究員	川 口 雅 之
調査事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総 務 係 長	平 野 浩 二
		主 事	福 山 恵一郎

3 確認調査の経過

確認調査の経過は、日誌抄により以下略述する。

平成17年1月5日（水）～1月7日（金）

- ・調査開始。発掘機材搬入。遺跡周辺の環境整備，安全対策。
- ・1～8号トレンチ設定及び掘り下げ。3号トレンチで古代～中世の遺物出土。一部取り上げ。

1月11日（火）～14日（金）

- ・9号トレンチ設定及び1～9号トレンチ掘り下げ。5号トレンチで溝状遺構検出。8号トレンチで縄文時代早期の遺物出土，取り上げ。
- ・多雨降水により作業中止。

1月17日（月）～21日（金）

- ・10～13号トレンチ設定及び1，3，7～13号トレンチ掘り下げ。1号トレンチで縄文時代早期の遺物検出，取り上げ。9号トレンチで遺構（道跡）検出及び精査。土器洗い。
- ・臨時駐車場設定。安全対策として各トレンチに柵及び滑り止め，手すりの設置。

1月24日（月）～26日（水）

- ・14号トレンチ設定及び3，8，12，14号トレンチ掘り下げ。12，14号トレンチで遺構（道跡）検出。5号トレンチ南側及び8号トレンチ北側の土層断面実測。
- ・全トレンチ終了後埋め戻し。
- ・撤収作業。

3 確認調査の概要と成果

未買収地を除く部分に15か所のトレンチを設定し，調査を行った結果，旧石器時代・縄文時代，及び中世の遺構・遺物を発見した。

1号・2号トレンチでは，層，層，層で縄文時代早期の遺物を確認した。3号トレンチでは層上面で土器片が少量確認されたので，トレンチを拡張して調査を行ったが，新たな遺物は発見できなかった。3号トレンチの層以下と4号トレンチでは遺物は確認できなかった。

5号トレンチでは，層上面で波板状遺構や溝状遺構を検出した。5号トレンチで検出した波板状遺構及び溝状遺構の広がりを確認するために，南北に新たに9号・12号・14号トレンチを設定した。各トレンチでは，層上面で古道や溝状遺構が検出された。なお，12号トレンチでは，層で古代の土師器が出土している。9号トレンチでは層まで掘り下げたが，層下位で遺物包含層は確認できなかった。

8号トレンチでは，層で石坂式土器，層で岩本式土器を1点ずつ検出した。トレンチを拡張して，遺物包含層の広がりを調べたが，この他に遺物は出土しなかった。8号トレンチの南側に10号トレンチを設定し，層まで慎重に掘り下げたが，遺構・遺物は確認されなかった。

11号トレンチの層では土器片が出土しているが，遺構は確認していない。13号トレンチと15号トレンチでは，遺構・遺物は確認していない。

縄文時代の遺物包含層は，1号と2号トレンチで確認したことから，遺物包含層の範囲を調査区南端（台地縁辺部）から3号トレンチの間と想定した。

5号・9号・12号・14号トレンチでは，波板状遺構や古道跡，溝状遺構を検出した。11号トレンチでは土師器が出土しているが，隣接する13号トレンチでは確認されていない。古代・中世の遺物包含層は，4号トレンチと11号トレンチの間に残存していることが想定された。

第1表 確認トレンチ調査の概要

トレンチ 番号	確認した 包含層	遺構検出面	検出遺構	出土遺物	時代	掘削した層	備考
1	b ~ 層			フレーク 石皿 凹石	縄文時代早期	層 ~ 層上面	
2	b・層			フレーク 石皿 凹石	縄文時代早期	層 ~ 層	
3	層上部			土器	縄文時代前期	層 ~ 層	層まで削平を受けている
4	包含層なし					層 ~ 層	
5	層	層上面	波板状遺構 2 条 溝状遺構 1 条	陶器	中世	層 ~ 層上面	
6	包含層なし					層 ~ 層上面	
7	包含層なし					層 ~ 層	
8	層			石坂式土器	縄文時代早期	層 ~ シラス上面	
9	層	層上面	古道 3 条 溝状遺構 1 条		中世	層 ~ 層	
10	包含層なし					層 ~ 層	
11	層			土師器	中世	層 ~ 層	層と 層が混在
12	層	層上面	古道 1 条 溝状遺構 1 条	土器 土師器	中世	層 ~ 層上面	大正時代のボラ層が 層と 層の間に存在する
13	包含層なし					層 ~ 層上面	
14	層	層上面	溝状遺構 2 条		中世	層 ~ 層上面	層まで削平を受けている
15	包含層なし					層 ~ 層上面	
16	包含層なし					層 ~ 層上面	
17	包含層なし					層 ~ 層上面	



第1図 確認調査トレンチ配置および本調査範囲図 (1: 2, 500)

第2節 本調査の経緯

1 本調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会では、確認調査の結果を踏まえ、改めて遺跡の取り扱いについて文化財課、道路建設課、埋蔵文化財センターの三者で協議し、遺跡の現地保存は困難であることから、本調査を実施することとした。調査は埋蔵文化財センターが担当することとなった。

本調査は調査面積約3,700㎡を対象として発掘調査を行い、調査期間は平成18年5月15日（月）から8月11日（金）の3か月間とした。

2 本調査の組織

平成18年度 本調査

事業主体者	鹿児島県土木部（鹿屋土木事務所）		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	上 今 常 雄 （～平成18年7月） 宮 原 景 信 （平成19年8月～）
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長 次長兼南の縄文調査室長 第一調査課長 主任文化財主事兼調査第一課第一調査係長	有 川 昭 人 新 東 晃 一 池 畑 耕 一 長 野 眞 一
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事 文化財研究員	小 林 晋 也 川 口 雅 之
調査事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長 主 事	寄井田 正 秀 五百路 真

3 本調査の経過

本調査の経過は、日誌抄により以下略述する。

平成18年5月15日（月）～5月19日（金）

- ・調査開始。発掘機材搬入。遺跡周辺の環境整備，安全対策。重機による第1地点及び第2地点表土剥ぎ。第2地点グリッド杭打ち。
- ・第1地点南側と第2地点A～C - 2～7区 層の掘り下げ及び遺構（道跡）検出。

5月22日（月）～26日（金）

- ・第2地点A～C - 2～12区の掘り下げ及び遺構（道跡）検出。
- ・第1地点西側土層断面図作成及び地形コンタ図作成。第1地点調査終了。
- ・第3地点A～C - 23～25区表土剥ぎ及び掘り下げ。

5月29日（月）～2日（金）

- ・ A～C - 9～10遺構（道跡）検出。A～C - 8区 層掘り下げ。A～C - 24区縄文時代早期包含層掘り下げ。
- ・ 雨天のため、2日だけ実施。

6月5日（月）～9日（水）

- ・ A～C - 2～7区掘り下げ及び遺構検出。A～C - 10～12区西側壁面土層断面実測。A～C - 19～22区重機で 層まで除去。A～C 19～25区掘り下げ及び遺構・遺物検出。

6月12日（月）～16日（金）

- ・ A～C - 6～12区遺構検出及び実測。A～C 19～25区掘り下げ及び遺構・遺物検出。縄文時代早期土器出土。
- ・ 空中写真撮影実施。鹿屋市立市成中学校1年生と職員見学。

6月19日（月）～22日（木）

- ・ A～C - 2～13区遺構（波板状遺構）検出及び地形コンタ図作成。B - 9区北側及び西側壁面土層断面実測。A～C - 9～25区 層まで掘り下げ及び遺構・遺物検出。

6月26日（月）～28日（水）

- ・ A～C - 2～13区遺構（溝状遺構）検出及び実測。
- ・ 雨天日が続く、作業工程が進まず。

7月3日（月）～6日（木）

- ・ A～C - 2～13区遺構実測及び遺物取り上げ。C～D - 2～13区作業終了。道路付け替え作業。
- ・ 農道下部分（C～D - 2～15区）の表土剥ぎ。A～C - 8～9区掘り下げ及び遺構・遺物検出。
- ・ 第1地点の水道管工事に伴う工事立会を行い、遺物包含層が削平されていることを確認。

7月10日（月）～14日（金）

- ・ A～C - 2～13区グリッド杭打ち。A～C - 5～13区掘り下げ、および遺構・遺物検出。
- ・ A～C - 18～22区遺物検出。縄文時代早期遺物出土。

7月18日（火）～21日（金）

- ・ A～C - 9～13区掘り下げ、遺構・遺物検出。溝状遺構（畠跡）検出及び実測。
- ・ A～C - 18～22区掘り下げ、遺構・遺物検出。縄文時代早期遺物出土。
- ・ 雨天のため作業を一日中止して図面整理。

7月24日（月）～28日（金）

- ・ A～C - 4～13区遺構・遺物検出及び地形コンタ図作成。
- ・ A～C - 18～22区地形コンタ図作成及び遺構・遺物検出。縄文時代早期遺物出土。
- ・ 百引小学校家庭教育学級による体験学習。発掘体験、石蒸し料理、勾玉づくりを実施。

8月1日（火）～4日（金）

- ・ A～C - 2～13区遺構検出及び実測。調査終了。
- ・ A～C - 19～22区遺構・遺物検出及び実測。

8月7日（月）～11日（金）

- ・ A - 19区西側壁面土層断面実測。A～C - 21～22区遺構・遺物検出及び遺物取り上げ，実測。縄文時代早期の炉跡，集石検出。
- ・ 全調査区調査終了。土木事務所と引き渡しの打ち合わせ。撤収作業及び荷物搬出。

第3節 報告書作成事業の経緯

1 報告書作成事業の経過

報告書作成及び整理作業については，平成20年度事業とし，埋蔵文化財センターで実施した。

2 報告書作成事業の組織

平成20年度 報告書作成

事業主体者	鹿児島県土木部（鹿屋土木事務所）		
作成主体者	鹿児島県教育委員会		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	宮 原 景 信
作成企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	平 山 章
		次長兼南の縄文調査室長	
			池 畑 耕 一
		第一調査課長	青 崎 和 憲
		主任文化財主事兼	
		調査第一課第一調査係長	
			長 野 眞 一
作成担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	小 林 晋 也
		文化財研究員	川 口 雅 之
事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総 務 係 長	紙 屋 伸 一
		主 事	五百路 真

第4節 発掘調査および報告書作成事業従事者

発掘調査作業従事者（33名）

井上セツ子 井上辰男 入佐ユリ子 岩元利秋 上村トシ子 川田昭人 倉富まち子
小平清子 妹尾伸吾 瀬戸口ヒメ 武元勝信 田中やえ子 田平義幸 寺園リツ子
西井田ゆかり 中島治夫 野迫香代子 浜谷敬子 原口一貴 原口新一 福寿良子 福元貞二
前田久隆 満沢勝男 満沢ユリ 室田イツエ 森岡敏 盛重久雄 盛重ヒロ 山口登美子
山下妙子 吉永時江 佐々木イツ子

報告書作成事業従事者（5名）

迫間洋子 田中周子 宗像昭子 山下節子 湯之上さゆり

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

堂原遺跡は、鹿屋市輝北町上百引に所在する。

鹿屋市輝北町は、鹿児島県の東部、大隅半島の北西に位置し、北は霧島市、西は垂水市、南は旧鹿屋市、東は曽於市に隣接する。東西11km、南北10.5kmのほぼ方形をなし、面積は8,895haであり、町内の7割近くは森林である。

大隅半島の地形は、基盤岩の露出する山地と南九州の広い範囲に分布する始良カルデラ起源の火砕流堆積物で形成するシラス台地から成る。大隅半島の基盤層は、高隈山周辺に分布する四万十累層群と志布志市から佐多岬にかけて分布する日南層群である。本町に広く分布する入戸火砕流堆積物（シラス）は、約28,000年前の始良カルデラ噴出物である。町の地勢は、西側を高隈山系が南北に走り、東側は梅ヶ渡川、平房川、堂簗川等川沿いに狭小な水田が展開する。

堂原遺跡は高隈山系の東側に位置し、標高300m程のシラス台地上に位置している。急傾斜する傾動地塊状の地形を呈しており、遺跡の東側を大鳥川（平房川）が流れ、台地を開析し深い谷を形成している。土壌はほとんどが火山灰土に覆われており、本遺跡は現在畑地として利用されている。

本遺跡の周辺では、南西側に前床遺跡及び鳥居ヶ段遺跡、南側に新田遺跡が知られている。いずれも中世の遺構・遺物を中心とする遺跡であり、特に新田遺跡においては掘立柱建物跡などが多数検出されている。

第2節 歴史的環境

文献で本町の地名が最初に確認できるのが保元元年（1135）の『宮永社役支配状』で、「市成」が確認できる。一方、「百引」の地名は、承安5年（1175）の『島津圧政所下文』に記載される。

堂原遺跡の周辺には、百引本城（別名坂下本城）址、小城（別名くずれ城）址がある。いずれも築城者、築城時期についての文献は残されないが、百引本城は、養和元年（1182）凶師氏の築城と伝えられる。また、小城は、堂簗川の上流にあった白岩城の出城とされ、『新編伴性肝属氏系譜』によれば、天文7年（1538）に落城したとある。なお、百引本城主を祀ったとされる蔵王権現社跡、その城主の奥方を祀ったとされる田中御前社跡も近くに位置している。

本遺跡から南東方向4km程には、利神社がある。利神社は、百引本城から東に望見できる堂簗川沿いの位置にあり、先の凶師氏が百引を治めた時に利大明神として奉じたとされ、明治期に現在地（上百引一番郷）に移された。

また、南東方向3km程には、真言宗坊津一乗院の末寺である千手院丸山寺跡がある。幕末・明治期の廃仏毀釈により廃寺となり、現在は跡形も無く、開基開山も不明である。ただ、寺内には古石塔群が残っており、その中にある五輪塔の塔身が3.23mにも達することから、権力を持っていたと考えられている。ちなみに、これらの古石塔群は、鹿屋市の文化財に指定されている。

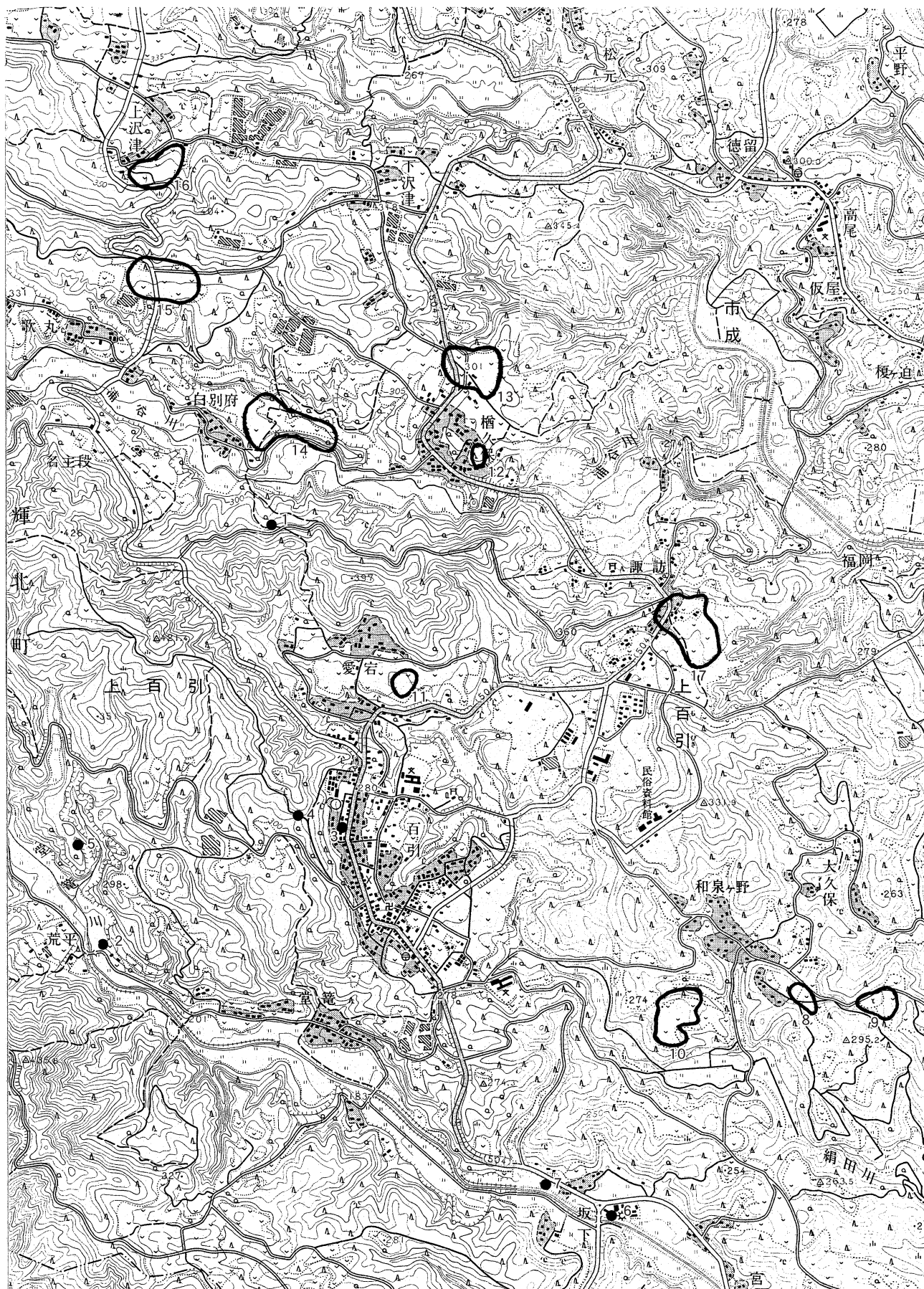
以上、本遺跡の周辺は、中世の歴史遺産が豊富で、近世には鹿屋街道、大崎街道が通っていたとされる。現在も国道504号が走り、一帯が交通の要衝として発展した経緯がうかがえる。

なお、鹿屋市輝北町の遺跡の概要については、第2表の通りである。また、堂原遺跡の周辺遺跡

については、第2図の通りである。

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	石ノ脇	上百引愛宕	丘陵端	不明	土器片	昭和56年分布調査
2	隠畑	上百引隠畑	扇状地	縄文時代（後）	土器片	昭和56年分布調査
3	麓	上百引一番郷	麓	古墳時代	骨壺・須恵器	昭和56年分布調査
4	西原城（舞天城）址	上百引一番郷	山陵	不明		
5	白岩城（オセロガ城）址	上百引風呂段	山陵	不明		
6	百引本城址	下百引坂下	山陵	不明		
7	小城（くずれ城）址	下百引坂下	平地	不明		
8	下高塚	上百引下高塚	台地上	古墳時代	土器片	平成3年分布調査
9	板段	上百引板段	台地上	縄文時代	土器片	平成3年分布調査
9	丸山寺古石塔群	下百引坂下	丘陵端	不明		
10	牧ノ段	上百引牧ノ段	台地上	古墳時代	土器片	平成5年農政分布
11	東石脇段	上百引愛宕	台地	古墳時代	土器片	平成8年分布調査
12	堂原	上百引檜久保	台地	古墳時代	土器片	平成18年調査
13	屋敷ヶ迫	上百引屋敷ヶ迫	台地	縄文、弥生、古墳	土器片	平成11年分布調査
14	中原	上百引中原	台地	古墳時代	土器片	平成11年分布調査
15	赤簿	上百引赤簿	台地	古墳時代	土器片	平成11年分布調査
16	矢五郎	市成矢五郎	台地	古墳時代	土器片	平成11年分布調査
17	柿内	上百引柿内	台地	縄文時代	土器片	平成11年分布調査
参 考	引地	下百引引地	丘陵端	縄文時代（早）	塞ノ神式土器	昭和56年分布調査
	徳光ヶ丘	下百引東原別府	台地上	縄文時代（中・後・晩）	春日・岩崎・草野・夜臼式土器	昭和56年分布調査
	ハシバダン（森永）	諏訪原ハシバダン	台地上	縄文時代（後）	土器片	昭和56年分布調査
	堀込	諏訪原堀込	扇状地	縄文時代（後）	土器片	昭和56年分布調査
	倉谷	諏訪原倉谷	扇状地	縄文時代（後）		昭和56年分布調査
	久木野々	市成久木野々	平地	縄文時代（後）	土器片	昭和56年分布調査
	観音ヶ尾	上百引岳野	山腹	縄文時代（後）	土器片	昭和56年分布調査
	青木段（松下）	平房下平房	台地上	弥生時代	有肩石斧	昭和56年分布調査
	垂野城址	市成上方	山陵	不明		昭和56年分布調査
	諏訪原城址	諏訪原朝倉	台地端	戦国時代	土器片	平成3年分布調査
	渡ヶ迫	下百引渡ヶ迫	台地上	古墳時代	土器片	平成3年分布調査
	前床	平房中平房	台地上	縄文時代（早・中）	土器片	平成7年調査
	鳥居ヶ段	平房中平房	台地上	縄文時代（前・中）	土器片	平成7年調査
	十環畑	市成十環畑	台地	中世	土器片	平成10年分布調査
	松木段	諏訪原松木段	台地	古墳時代	土器片	平成11年分布調査
	津曲迫	諏訪原津曲迫	台地	古墳時代	土器片	平成11年分布調査
	吉元	上百引吉元	台地	古代、縄文時代		平成14年調査
	新田	下百引新田	台地	古代、中世、縄文時代		平成15年調査



第2図 周辺遺跡位置図 (1 : 25,000)

第Ⅲ章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の方法

発掘調査は調査区を3か所に分け、北側から第1地点、第2地点、第3地点と呼称して調査を進めた。確認調査の結果、第1地点の大部分は削平されていたが、南端で古代の包含層と道跡を検出することができた。また、第1地点と第2地点の間のアスファルト道路部分は、工事立会で確認したところ、包含層は残存していなかった。

したがって、第2地点及び第3地点が主体となる調査対象区域とし、10mグリッドを設定して調査を実施した。グリッドには、調査区の西 - 東軸にA ~ Dのアルファベット名を、北 - 南軸に1 ~ 25の数字名を付した(第3図)。

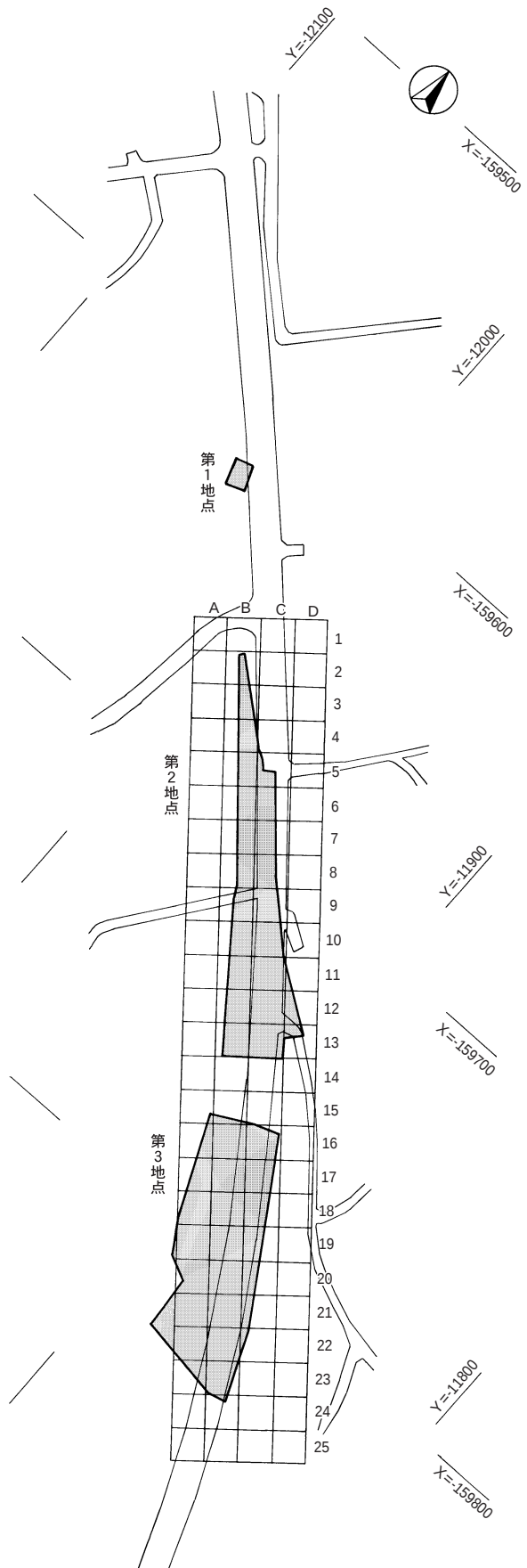
第2地点の調査は、道路の付け替えを行う関係上、拡張する西側半分を先に実施し、その後迂回路を設置して東側半分(現道部分)の調査を行った。第3地点は、廃土処理の問題から南側から調査を行い、第2地点と第3地点の間を廃土置き場として利用することにした。

工程としては、確認調査で検出された道跡が集中するB・C - 2 ~ 13区と、縄文時代早期の遺物が集中する第3地点A ~ C - 18 ~ 22区に時間を重点配分する方法を採ることにした。

また、第2地点の中間部に東西に横切る農道があるが、隣接の畑を耕作するために必要だったため、その部分は最後に残して、耕作に支障がないように短期間で調査を終了させ、仮設道路を設置した。

調査時期が梅雨と重なったことと、水捌けが決してよいとは言えない土壌であったため、水を掻き出す作業に追われることもしばしばあり、作業の進捗が思うようにいかない場面も多々あった。

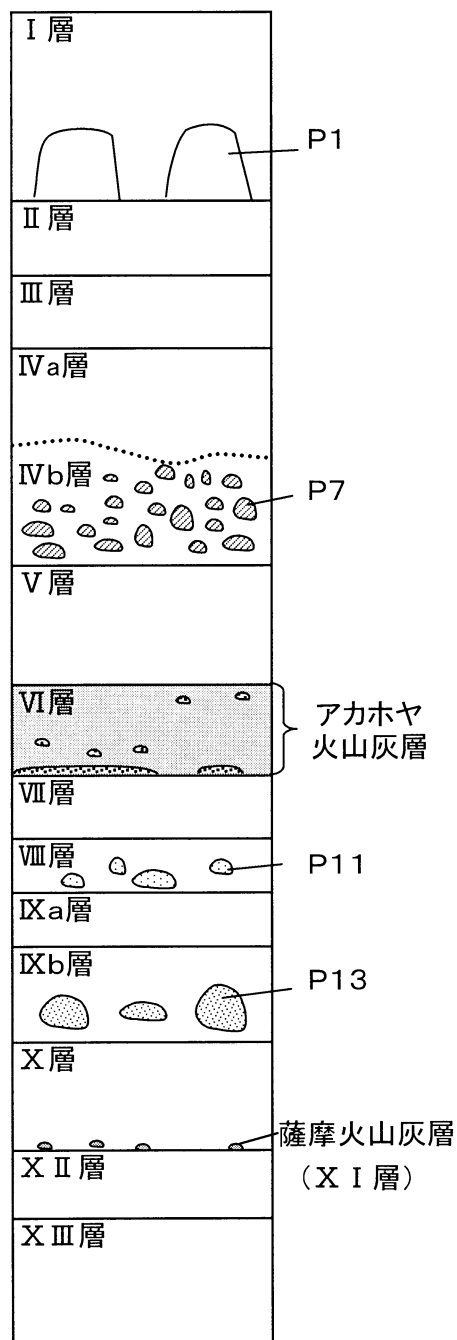
また、工事計画の関係上、水道管が地表に裸出していたため、真夏日が続く中、冷水がなかなか出てこない状態が続くなど、作業環境に苦しむ中での作業となった。調査面積は3,700m²である。



第3図 グリッド配置図 (1 : 2,000)

第2節 層序

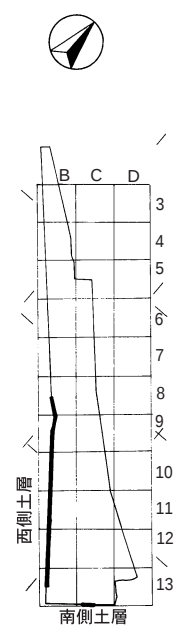
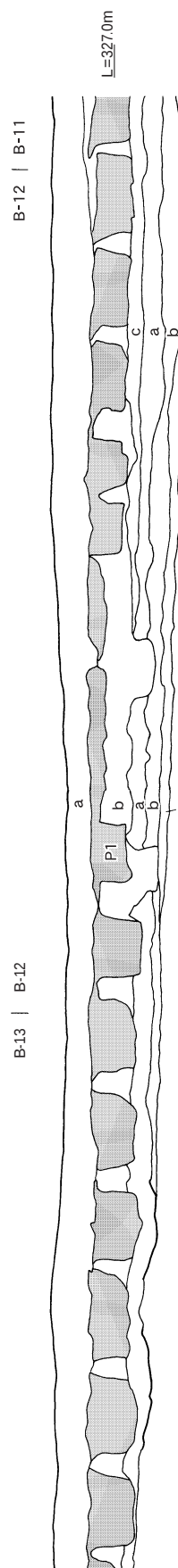
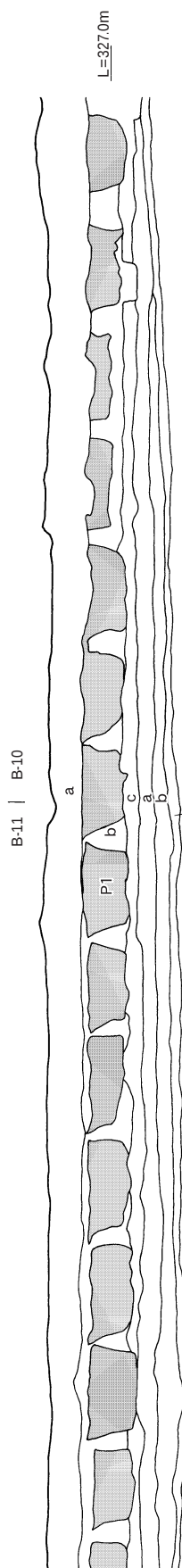
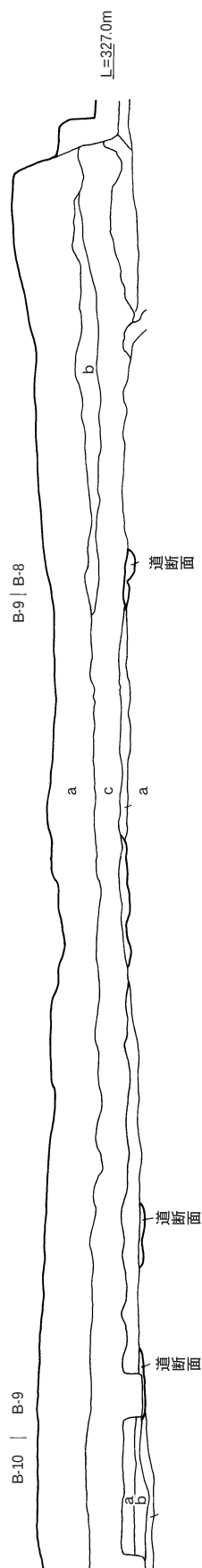
古代・中世の主たる遺物包含層である 層は部分的に削平され、古代・中世の遺構検出面は 層上面となる。 ～ 層は縄文時代早期の遺物包含層であり、遺構検出面は 層上面である。また、火山噴出物の堆積は明瞭で、噴出源に近いこともあり、桜島起源の噴出物である P 1 , P 7 , P 11 , P 13等が良好な状態で観察できる。特に P 1 と P 11は、この地域では、堆積状況が良好である。薩摩火山灰 (P 14) は堆積が薄く、 層と 層の間に点在している状態であった。



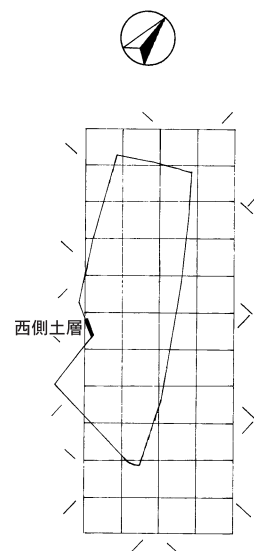
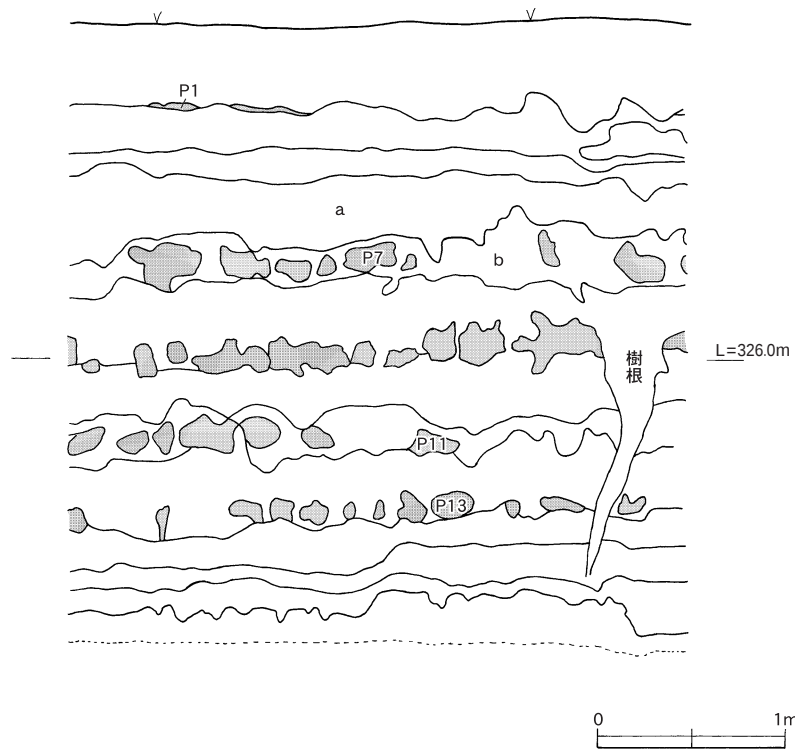
第4図 土層模式図

第3表 基本土層

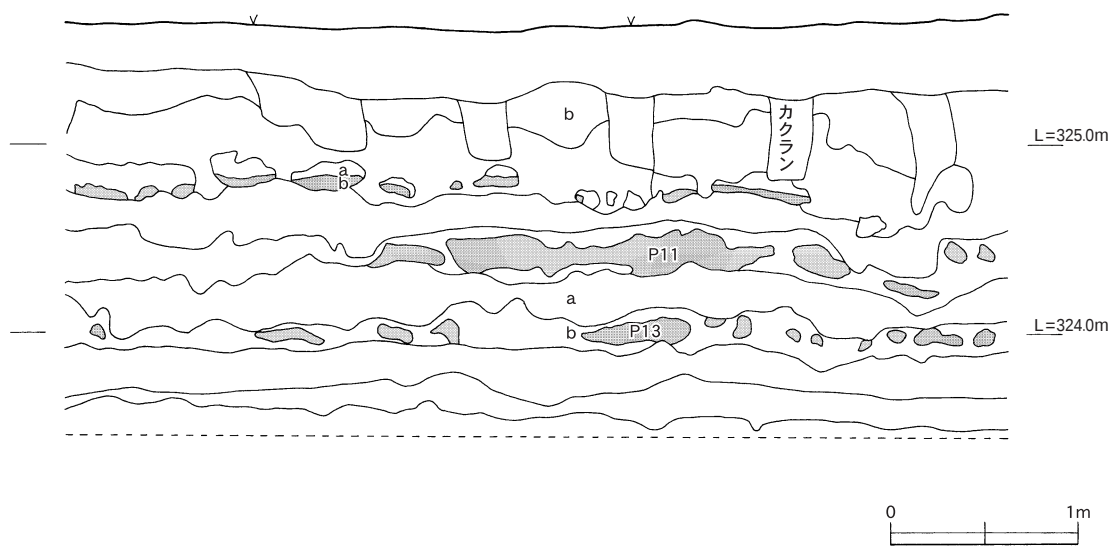
層	暗褐色砂質土。現在の表土で軽石を多く含み、しまりがいい。層との境に2mm～5mm大の軽石層が等間隔に残る。この白色の軽石層は大正10年の桜島起源の火山灰 (P 1) と考えられる。
層	黒色砂質土。道跡や溝状遺構の埋土である中世の遺物包含層。しまりがよく、軽石や小石を含まない。下部に橙色のブロックを多く含む。第3地点においては大部分が削平されている。
層	黄褐色砂質土。上部はしまりがなく柔らかい。下部は色調が暗く、P 7 のパミスを少量含み固くしまっている。ほぼ水平堆積で、本層上面で遺構を検出する。
a 層	褐色砂質土。固くしまっており、層の上下に P 7 のパミスを含む。
b 層	黄褐色砂質土。P 7 の一次堆積をブロック状で所々に含む。
層	褐色粘質土。硬くしまっていて所々に P 7 のパミスを含む。下部は上層よりも粘性があり、浅黄色のブロックを部分的に含む。
層	アカホヤ火山灰。上部は赤褐色を呈する厚さ10cm程度の二次堆積層から成る。下部は細かなパミスによる一次堆積層である。上層の落ち込みにより、ブロック状で薄く堆積している。
層	暗褐色砂質土。P 11の腐食土でしまりがよく、所々にパミスを含む。
層	暗褐色砂質土。P 11の一次堆積をブロック状に多く含む。凹凸が著しい。縄文時代早期の遺物包含層。
a 層	暗褐色砂質土。P 11の軽石を多く含む。縄文時代早期遺物包含層。
b 層	黒褐色砂質土。P 13をブロック状に含む。縄文時代早期遺物包含層。
層	黒褐色砂質土。P 13の軽石を多く含む。縄文時代早期遺物包含層。
層	薩摩火山灰層。壁面からは、薩摩火山灰をはっきり確認することはできないが、 層上面で点在していることが確認できる。
層	黒色ローム層。弱い粘性を持ち、しまりがいい。
層	灰黄褐色ローム層。しまりがよく、細かい火山灰が固くしまっている。



第5図 第2地点西側壁面土層断面図



第6図 第2地点南側壁面土層断面図



第7図 第3地点西側壁面土層断面図

第3節 縄文時代の調査成果

1 調査の概要

確認調査の結果、縄文時代早期の遺物が確認トレンチ1・2の 層～ 層で確認されていたことから、重機で 層上面まで除去し、その後人力で掘り下げた（第8図）。表土剥ぎの範囲は、縄文時代早期の地形面を把握するために、調査区の南端から3号トレンチ北側までとした（面積約1,900m²）。その後、旧石器時代の遺構・遺物を確認するため、先行トレンチ1・2を設定し、 層以下の掘り下げを行った。旧石器時代の遺物包含層は確認されなかったが、縄文時代早期の遺物は先行トレンチ1の東側に集中し、2号トレンチまでは広がらないことが明らかとなった（第11図）。この結果を基に、 層～ 層の調査を、先行トレンチ1の東側から先行トレンチ2周辺にかけて行った（面積約490m²）。

本調査では、集石3基、炉跡4基、縄文時代早期の土器・石器を検出した。遺物は、 層、 層及び 層上、 層下、 層に分けて取り上げ、注記を行った。 層の遺物は、上層と下層に分けて取り上げており、これを基本土層に対応させると、 層及び 層上が a層、 層下が b層となる。

2 遺 構

遺構には、集石3基と炉跡4基がある。集石1・2号、炉跡1～4は台地の落ち際に沿って検出された。集石の確認面は集石1・2が 層、集石3は 層上面であり、集石1・2号と3号の確認面にはレベル差がある。礫は安山岩の角礫が主体で、水磨が著しいことから、台地下を流れる浦谷川で採取したものと考えられる。

炉跡は、全て 層上面で検出された。炉跡が検出された地点は、台地の縁辺であるため、 層～ 層の堆積が薄く、炉跡の掘り込みは 層まで達していた。炉跡の埋土は 層に近いので、時期は縄文時代早期で、掘り込み面は 層付近であると想定している。

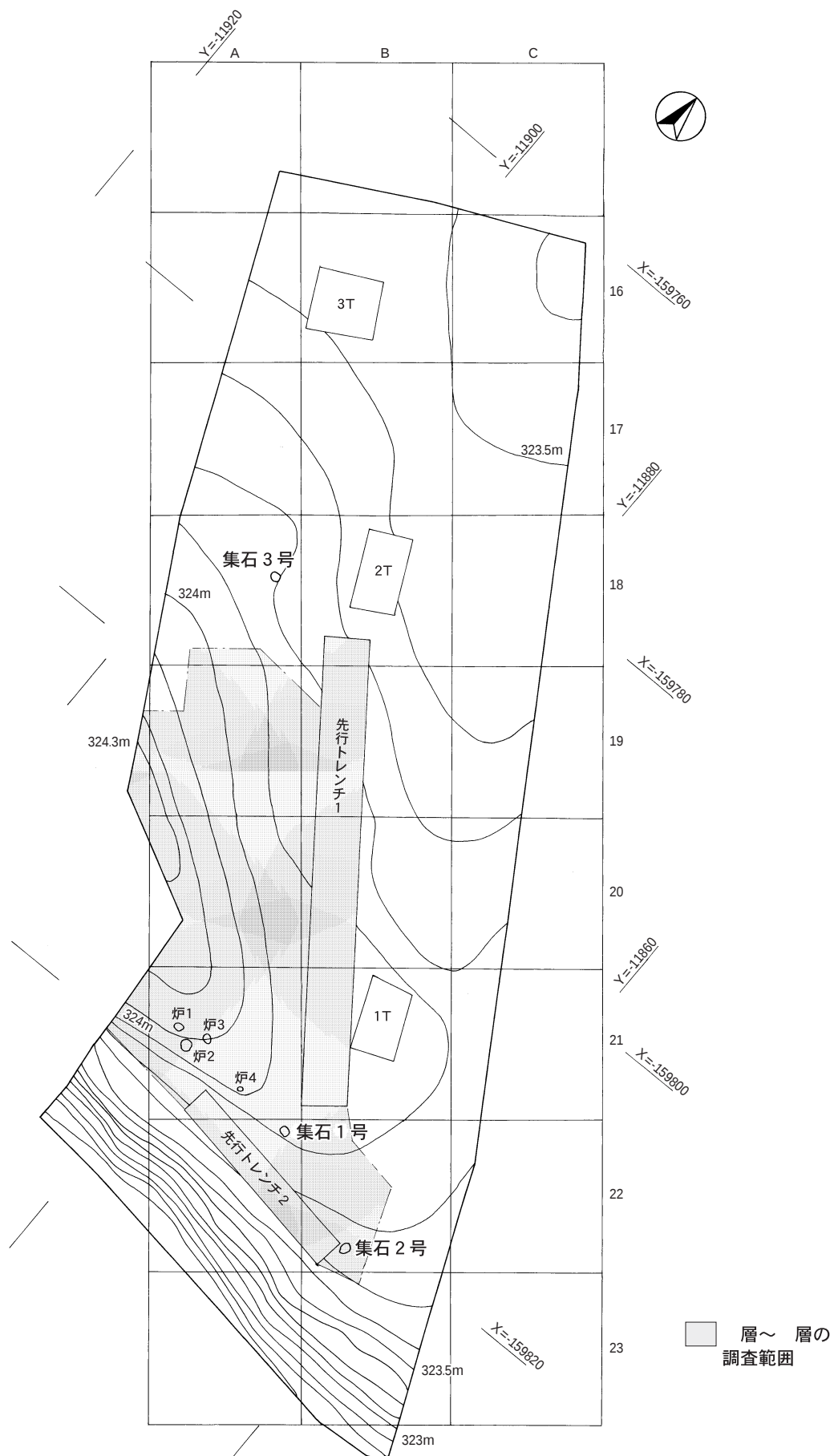
(1) 集石（第9図）

集石1

A - 22区の 層で確認された。礫が南北に細長く散在し、目立った集中域は形成されていない。レベル差もないことから、投棄されたような感じを受ける。使用されている礫は、4cm～10cm大の安山岩及び軟質の堆積岩である。水磨した角礫が主体を占め、焼けた痕跡は認められない。掘り込みはなく、炭化物、焼土は確認できなかった。礫の総数38個、総重量4.5kg。

集石2

B - 22区で b層～ 層を掘削中に確認された。5cm～15cm大の角礫が北東から南西方向に傾斜している。礫の集中する範囲は、60cm～80cmで、一段目の礫を取り外すと、その下にやや大きめの礫を直径40cmの円形に配置していた。掘り込みは、 層上面で検出され、その規模は0.7m×1m、深さ18cmである。礫とややずれているが、集石に伴うものと考えられる。



第 8 図 第 3 地点縄文時代早期遺構配置図 (1 : 400)



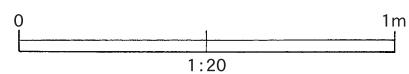
集石 1 号



集石 2 号



集石 3 号



第 9 図 集石 1 ~ 3 号

礫は焼けており，周辺の土に炭化物が混じることから，この場で火を焚いて使用したものと考えられる。明瞭な焼土は認められなかった。礫の総数72個，総重量69kg。

集石 3

A - 18区の 層上面で確認された。5 cm ~ 20cm大の円礫及び角礫が，直径 1 mの範囲に集まっている。礫は，表面が赤色化しており，火を受けたものとみられるが，焼土跡や炭化物が確認できず，密度も低いことから，この場で使用されたとは考えにくい。礫にレベル差はなく，掘り込みも確認できなかった。礫は水磨した質の悪い安山岩が主体を占め，赤色の脆い堆積岩が少量混じる。礫の総数42個，総重量52kg。

(2) 炉跡（第10図）

A - 21区で，4基の掘り込みを検出した。埋土に炭化物を多く含み，少量ではあるが焼土も認められることから，炉跡と判断した。

炉跡 1 の掘り込みは円形を呈し，規模は0.6m × 0.5m，深さ 6 cmである。

炉跡 2 の掘り込みは円形を呈し，規模は0.8m × 0.7m，深さ18cmである。

炉跡 3 の掘り込みは円形を呈し，規模は0.62m × 0.54m，深さ14cmである。

炉跡 4 の掘り込みは円形を呈し，規模は0.44m × 0.46m，深さ12cmである。

3 遺物

縄文時代早期の遺物は，A - 19 ~ 21区に集中している。その大半は，破碎礫等であり，土器，石器の出土量は少ない（第11図）。ここでは，確認調査で出土した出土遺物も含めて報告する。

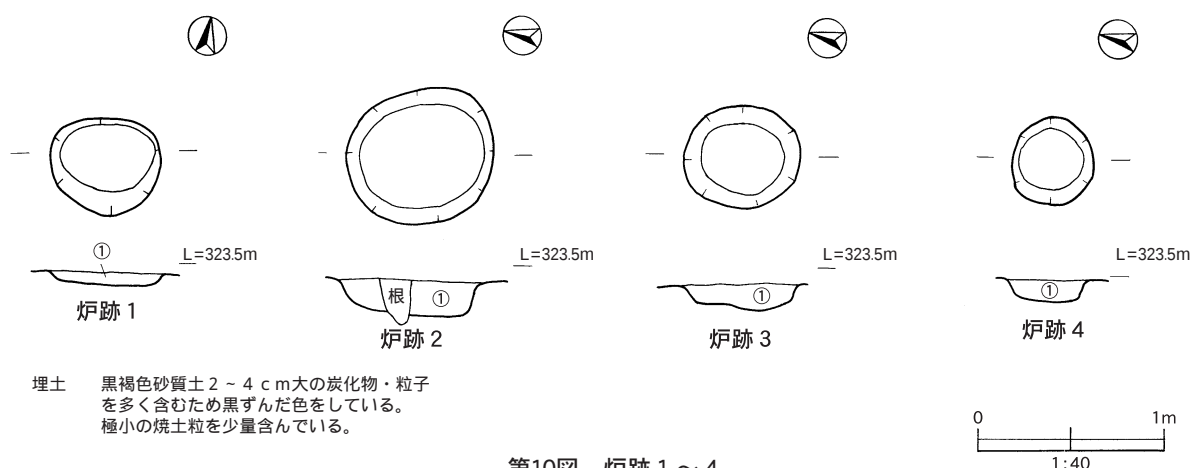
(1) 土器

岩本式土器，前平式土器，加栗山式土器，吉田式土器，桑ノ丸式土器が，縄文時代早期の遺物包含層である 層 ~ 層で出土した。第4表は，縄文時代早期の土器型式と出土層位の関係をまとめたものである。これをみると，攪乱等により多少の上下移動はあるが，前平式土器は 層 ~ b層で，桑ノ丸式土器は a層を中心に出土していることが分かる。b層の前平式土器は，同層中に堆積するP13の上下で出土しており，P13によって前平式土器の帰属層位を峻別することはできなかった。この他に，3号トレンチでは，アカホヤ火山灰上位の 層で，縄文時代前期の土器が1個体出土している。以下，型式ごとに報告する。

第4表 縄文時代早期土器層位別出土状況

		土器形式					
		岩 本	前 平	加栗山	吉 田	桑ノ丸	その他
層 位		1			2	3	1
	a		2			17	2
	b		7	1	2	4	1
		1	6			1	

数字は，型式の判別できる破片数をカウントしたものである。



第10図 炉跡 1 ~ 4

縄文時代早期の土器

1・2は口縁端部に深い刻目を施すため、口縁部が波状を呈している。口縁部外面に、斜位または横位の貝殻刺突文を施し、内面には段を有する。内外面に細かな条痕を施し、胎土には石英、白色砂粒を含む。岩本式土器に該当する。

3～5は同一個体で、円筒形を呈する。3の胴部と4の底部は、接合しなかったので別々に掲載した。口縁部上端には押引状の刺突文を、外面には深い楕円形の刺突文を巡らす。胴部外面には、深くしっかりとした貝殻条痕文を横位に施し、内面にはケズリを施す。器壁が薄く、外面は焼けているため煤が付着している。胎土には石英、角閃石を多く含む他、赤褐色の粒もみられる。6～9は角筒形土器の胴部である。6は口縁部付近に横位の貝殻刺突文を施し、胴部はいわゆる2重施文で、貝殻条痕後に沈線文を施す。内面はケズリ調整で、胎土に角閃石、石英、砂粒を含む。7・8も貝殻条痕後に沈線文を施している。3～9は前平式土器に該当する。

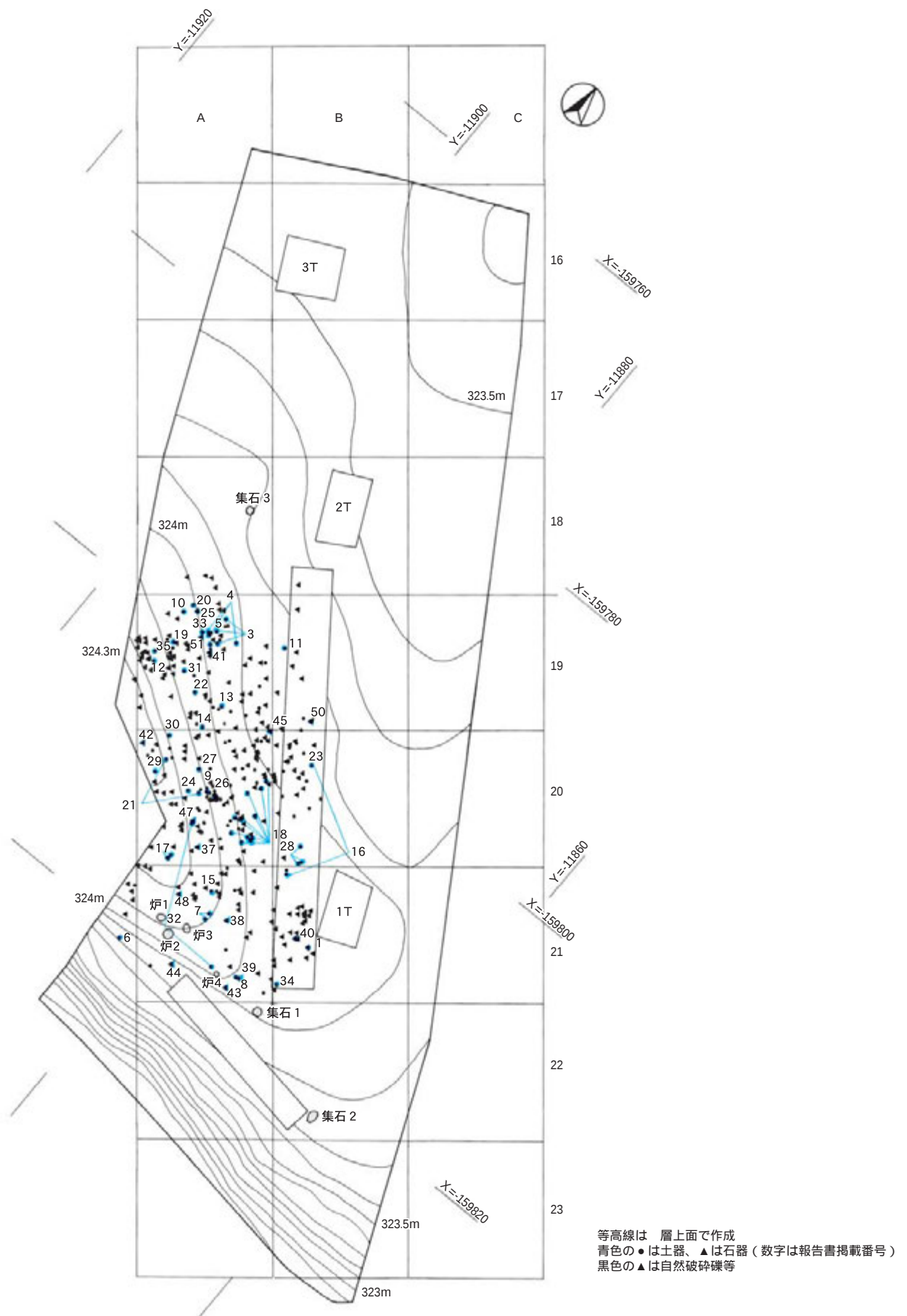
10は角筒形土器の胴部で、外面に貝殻条痕を施した後、楔形の貼付文を貼り付けている。胎土には、大粒の石英、角閃石、砂粒を含んでいる。加栗山式土器に該当すると考えられる。

13・14・17は吉田式土器である。13は外面に貝殻押引文と横位の貝殻刺突文を施す。14と同一個体の可能性がある。14は口縁部で、上面に刻目、外面には横位の貝殻刺突文と貝殻押引文を施す。内面はナデ調整で、胎土に石英、砂粒を含む。17は胴部片である。外面に貝殻押引文、内面にナデ調整を施す。胎土に少量の石英と砂粒を含む。

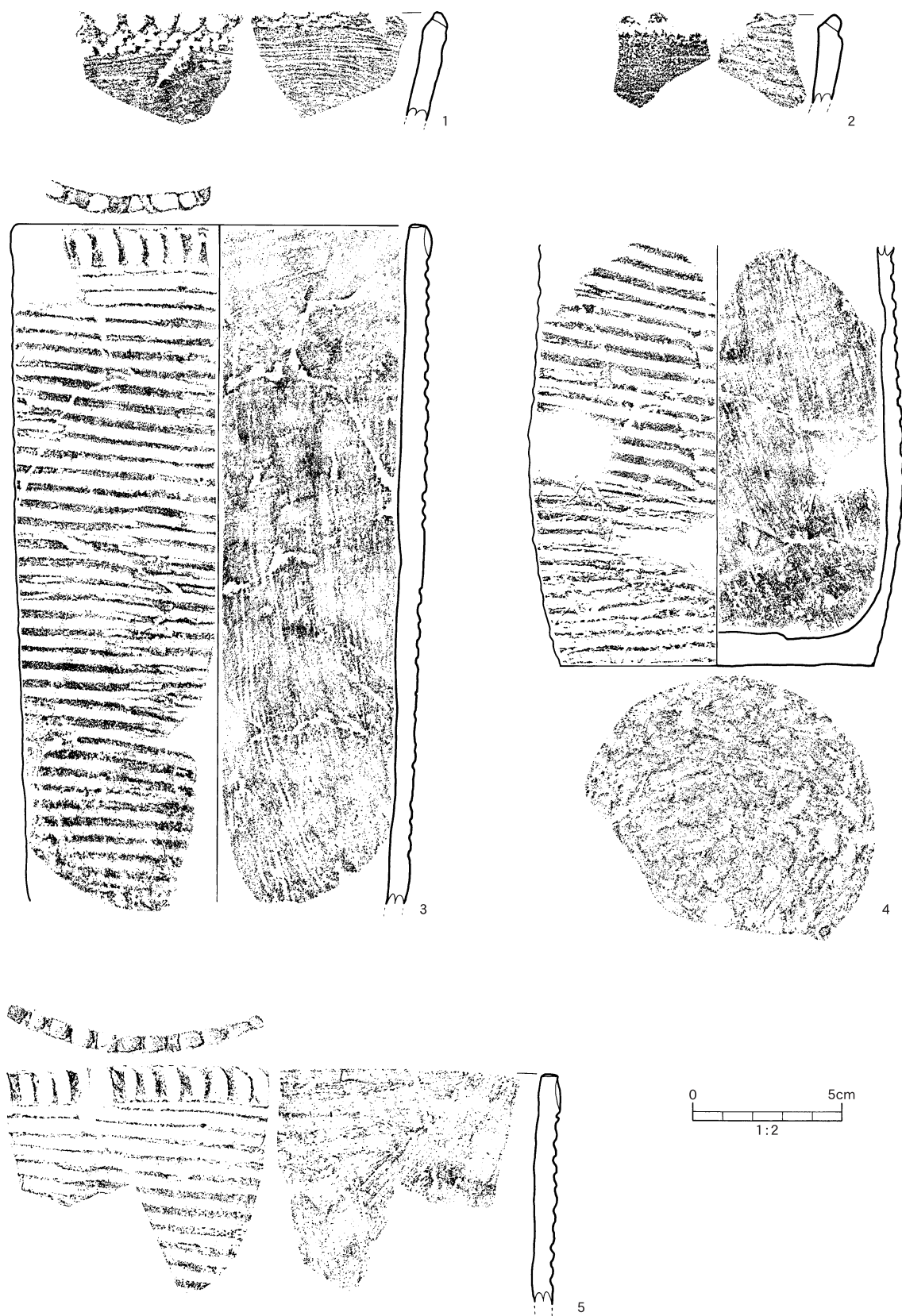
18～27は外面に貝殻条痕による横位の沈線文と羽状文を施す。外面調整はナデ、内面調整はミガキで、胎土に石英、金雲母、白色砂粒、小石を含む。桑ノ丸式土器に該当する。

18は器形がバケツ形を呈し、復元口径27.6cm、底径16.2cm、器高27.4cmである。口縁部と底部外面には、横位の沈線文が波状に巡り、胴部には羽状文を施す。接合しなかったが、19とは同一個体とみられ、本来は口縁部に瘤状突起がつくものと推測される。

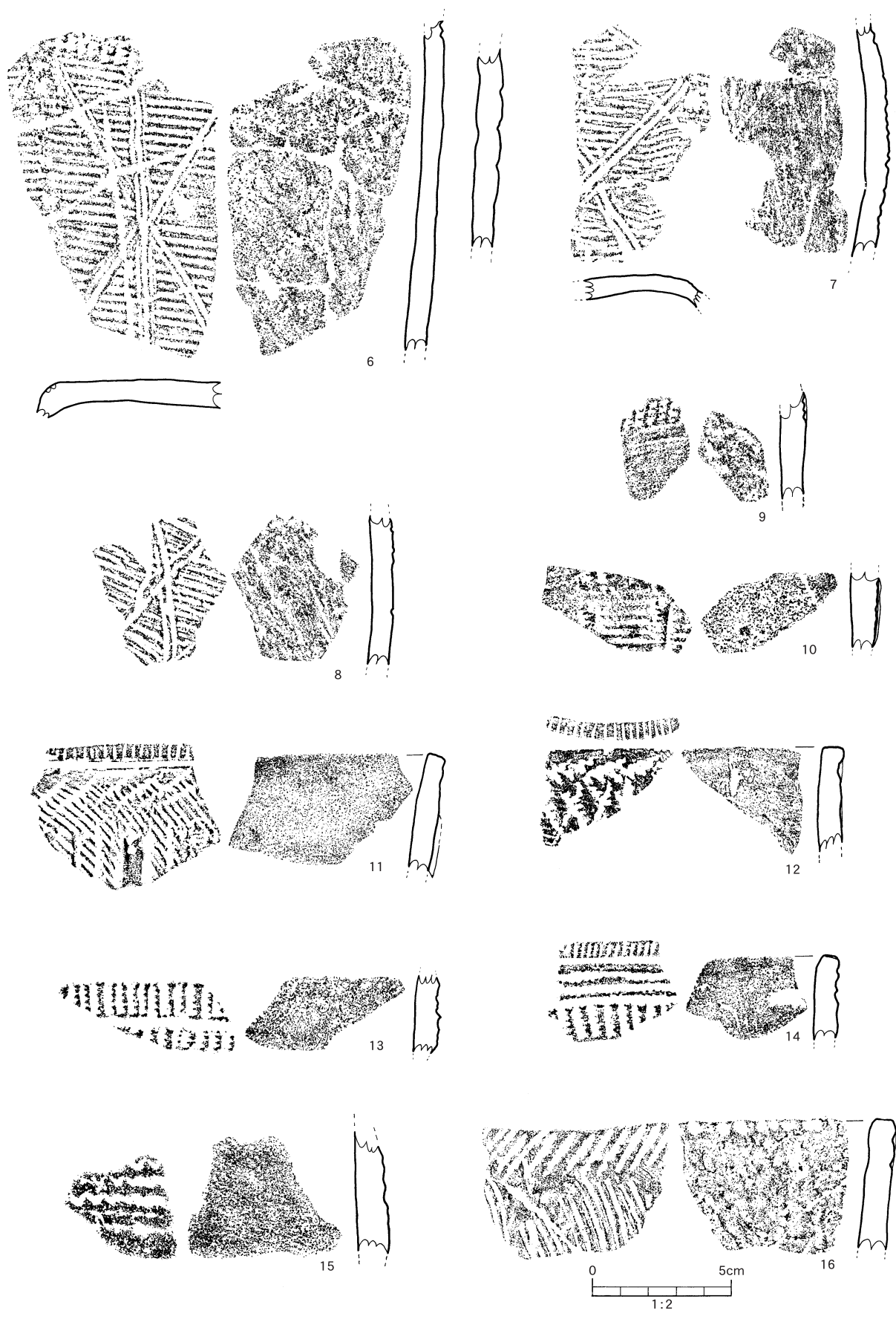
11・12・15は、吉田式土器であり、16は型式の判別が難しいものである。11は口縁部上面に刻目を施し、外面に斜位の貝殻刺突文を施す。胴部は斜位の貝殻条痕の上に、縦位の貝殻刺突文と楔形貼付文を施す。器壁が薄く丁寧な作りである。12は口縁部上面に刻目を施し、外面に貝殻刺突文を格子目状に施す。文様の施文は雑である。16は口縁部外面に貝殻刺突文を施し、内面には小さな窪みが連続してみられる。胴部外面に条痕を施し、胎土に石英、角閃石を含む。



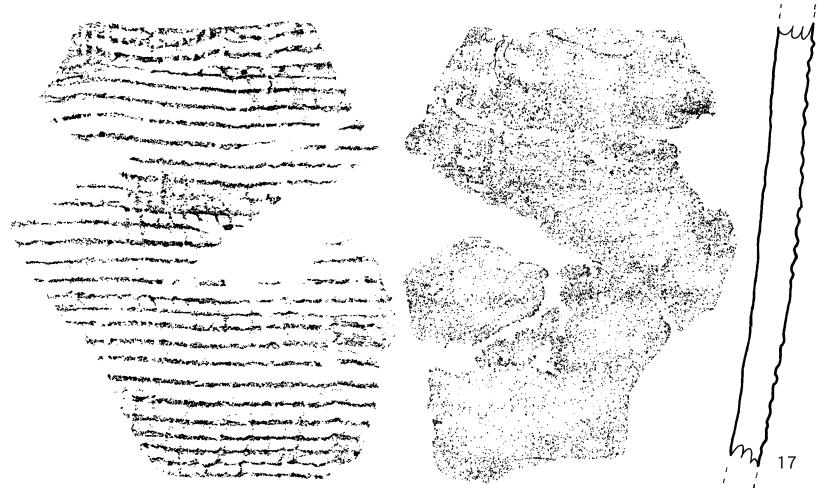
第11図 第3地点縄文時代早期（Ⅷ層～Ⅹ層上面）遺物出土状況図（1：400）



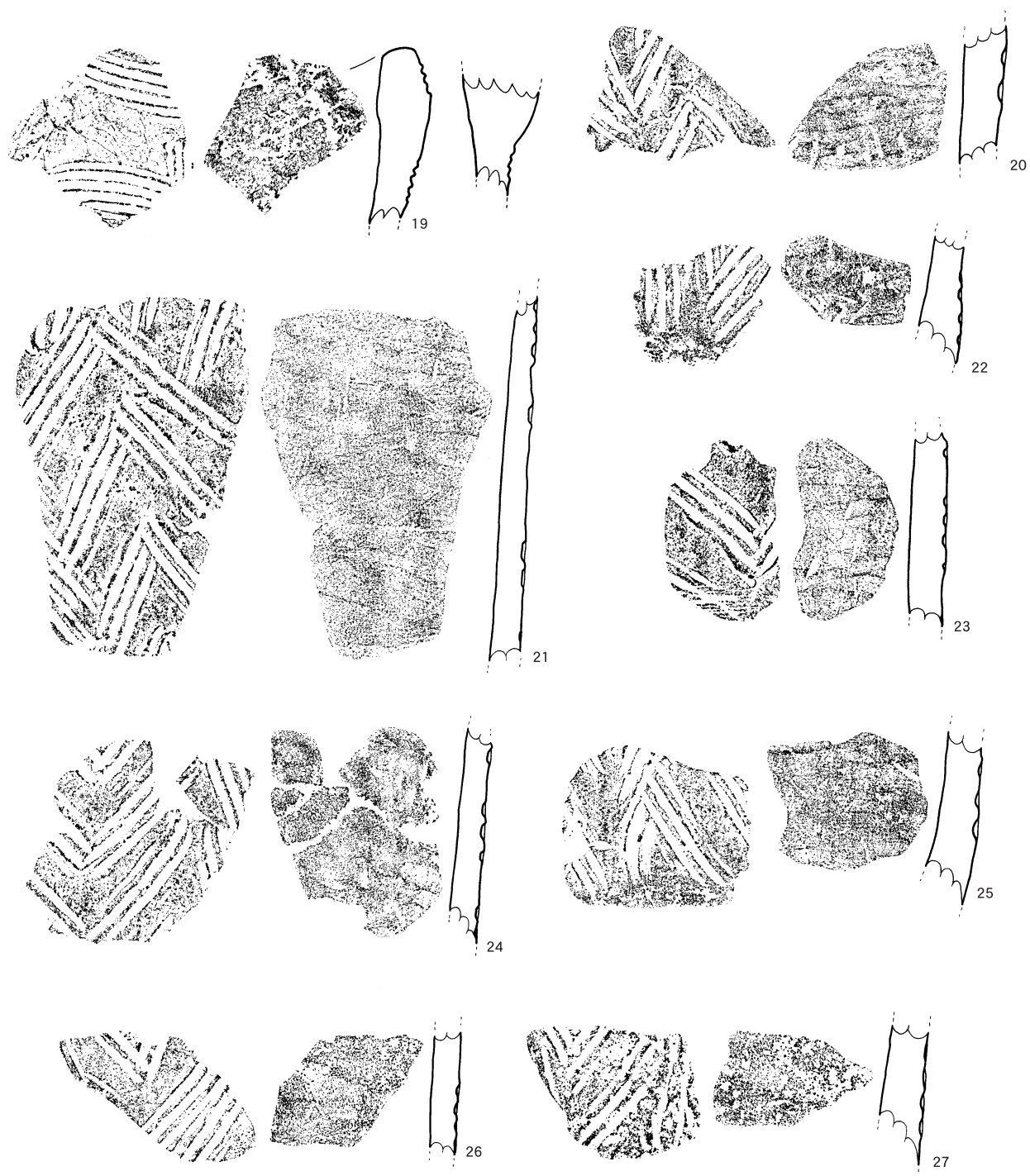
第12図 縄文時代早期土器 1



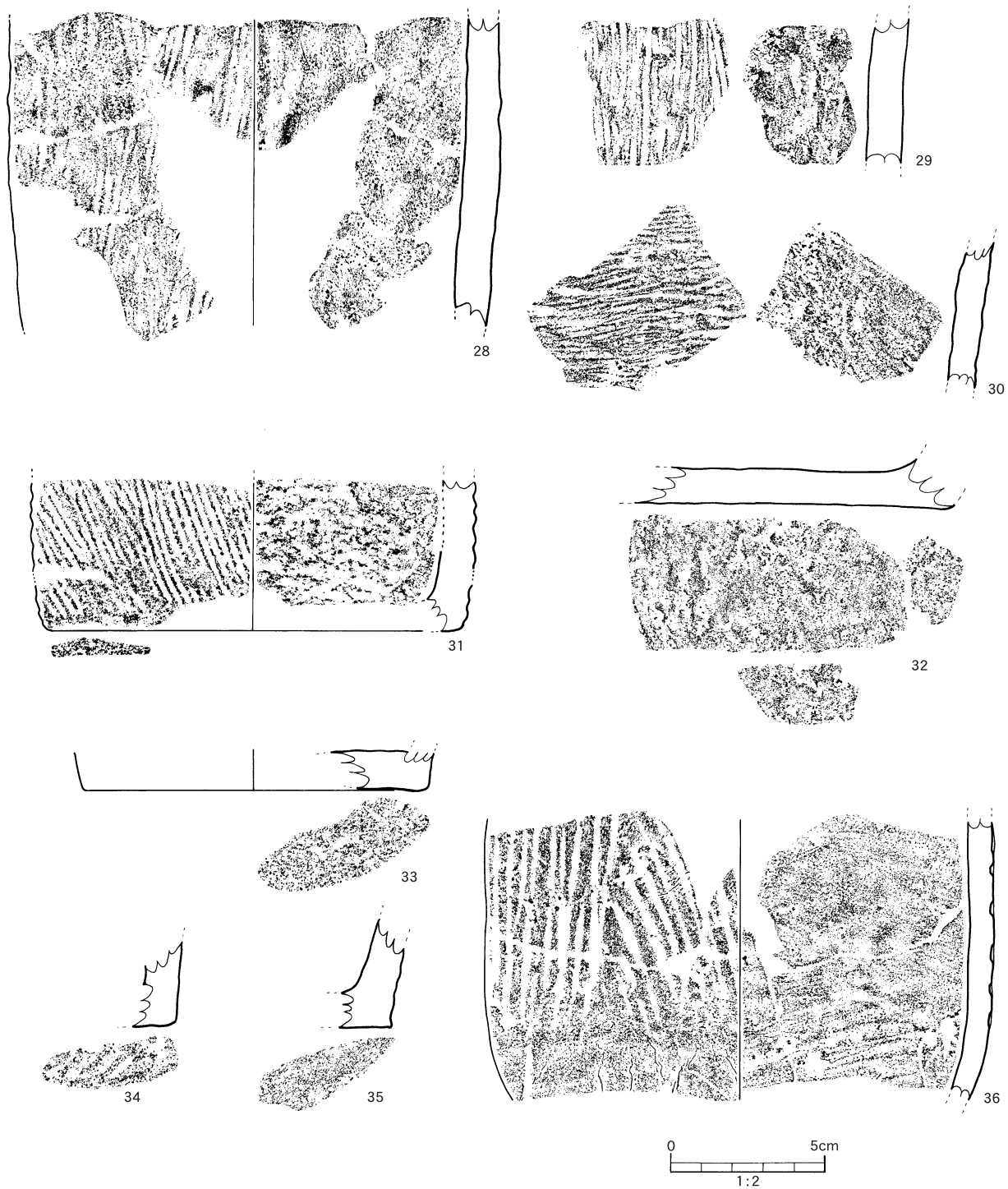
第13図 縄文時代早期土器 2



第14図 縄文時代早期土器 3



第15図 縄文時代早期土器 4



第16図 縄文時代前期土器

第5表 縄文時代出土土器観察表

()は復元値

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	部位	法量 (cm)	調整		色調		取上番号	備考
							外	内	外	内		
12	1	8 T		深鉢	口縁		条痕	条痕	にぶい 黄褐	明黄褐	31	岩本式
	2	A - 21		深鉢	口縁		条痕	条痕	にぶい 黄褐	明黄褐	21	岩本式
	3	A - 19	・ 下・	深鉢	口縁・ 胴部	口径 (13.8)	貝殻 条痕	ケズリ	灰黄褐	黒褐	342・365・366・ 368・369	前平式
	4	A - 19	下・	深鉢	底部・ 胴部	底径10.3	貝殻 条痕	ケズリ	灰黄褐	黒褐	341・353・370	前平式
	5	A - 19	下	深鉢	口縁		貝殻 条痕	ケズリ	黒褐	明黄褐	343	前平式
13	6	D - 21		深鉢	胴部		貝殻 条痕	ケズリ	黒褐	黒褐	308	前平式
	7	A - 21		深鉢	胴部		貝殻 条痕	ケズリ	黒褐	にぶい 黄橙	243・244	前平式
	8	A - 21	下	深鉢	胴部		貝殻 条痕	ケズリ	にぶい 黄橙	灰黄褐	192	前平式
	9	A - 20		深鉢	胴部		貝殻 条痕	磨滅	にぶい 黄褐	黒褐	218	前平式
	10	A - 19	下	深鉢	胴部		貝殻 条痕	ナデ?	黒褐	褐色	355	加栗山式
	11	A - 19	下	深鉢	口縁		貝殻 条痕	ナデ	浅黄	浅黄	298	
	12	A - 19		深鉢	口縁		貝殻 条痕	ナデ	灰黄褐	浅黄	319	
	13	A - 19	下	深鉢	胴部		貝殻 押引文	ナデ	明黄褐	にぶい 黄橙	279	吉田式
	14	A - 19	下	深鉢	口縁		貝殻 押引文	ナデ	明黄褐	にぶい 黄褐	333	吉田式
	15	A - 21		深鉢	胴部		磨滅	ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	75	
	16	B 20・21	・	深鉢	口縁		条痕	ナデ	にぶい 褐	褐	12・19	
14	17	A - 20		深鉢	胴部		貝殻 押引文	ナデ	橙	にぶい 黄橙	82・83	吉田式
	18	A 20・21 B - 20	・ ・	深鉢	口縁・ 胴部・ 底部	口径 (27.6) 底径16.2 器高27.4	ナデ	ミガキ 後ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	88・92・101・102・ 112・113・183・ 186・136・132・228	桑ノ丸式
15	19	A - 19	下	深鉢	口縁		ナデ	ミガキ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	266	桑ノ丸式
	20	A - 19	下	深鉢	胴部		ナデ	ミガキ	褐	褐	357	桑ノ丸式
	21	A - 20	・ 下	深鉢	胴部		ナデ	ミガキ	褐灰	褐	124・214	桑ノ丸式
	22	A - 19	上	深鉢	胴部		ナデ	ミガキ	褐	褐	272	桑ノ丸式
	23	B - 20		深鉢	胴部		ナデ	ミガキ	褐	褐	12	桑ノ丸式
	24	A - 20	下	深鉢	胴部		ナデ	ミガキ	褐	褐	213	桑ノ丸式
	25	A - 19	上	深鉢	胴部		ナデ	ミガキ	褐	褐	356	桑ノ丸式
	26	A - 20		深鉢	胴部		ナデ	ミガキ	褐	褐	110	桑ノ丸式
	27	A - 20		深鉢	胴部		ナデ	ミガキ	褐	褐	126	桑ノ丸式
16	28	B - 20・21	・	深鉢	胴部	(16)	条痕	ナデ	明褐	黒	16・17・18・155	
	29	A - 20		深鉢	胴部		条痕	ナデ	明褐	灰褐色	123	
	30	A - 20		深鉢	胴部		条痕	ナデ	明褐	灰褐	207	
	31	A - 19	上	深鉢	底部	底径 (13.5)	条痕	剥落	明黄褐	明黄褐	270	
	32	A - 20・21	・ 下	深鉢	底部		ミガキ	ナデ	明褐	明黄褐	77・180・193	
	33	A - 19	上	深鉢・ 円筒形	底部	底径 (11.2)	磨滅	磨滅	明褐	にぶい 黄褐	340	
	34	B - 21		深鉢	底部		磨滅	剥落	にぶい 黄橙	灰黄褐	42	
	35	A - 19	下	深鉢・ 円筒形	底部		条痕?	ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	260	
	36	3 T・8 T	・	曽畑式	胴部	(16.5)	ナデ	ナデ	にぶい 黄橙	明黄褐	1・2・3・4	曽畑式

第 6 表 縄文時代出土石器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	石材	最長	最幅	最厚	重さ	取上番号	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
17	37	A - 20		石斧	砂岩	13	6	2.3	230	33	
	38	A - 21		石斧	ホルンフェルス	11.6	4.8	1.9	129	60	
	39	A - 21		石鏃未製品	黒曜石	1.2	1.4	0.3	0.5	248	
	40	8 T	上	フレーク	頁岩	1.4	1.3	0.3	0.5	30	
	41	A - 19		フレーク	黒曜石	2	1.2	1.1	2.4	290	
	42	A - 19	下	磨・敲石	安山岩	8.1	8.0	3.8	360	302	
	43	A - 21		磨石	安山岩	5.3	4.8	2.9	110	306	
	44	A - 21		磨石	安山岩	5.0	4.1	2.9	90	303	
	45	A - 20	下	磨石	安山岩	9.8	8.4	5.1	480	196	一部焼けている
	46	A - 19		磨石	安山岩	8.5	6.4	4.4	320	399	
	47	A - 20		石皿	安山岩	16.4	10.5	6.5	1710	230	
18	48	A - 21		石皿	凝灰岩	20.7	18.0	4.4	2190	68	焼けている
	49	A - 23		石皿	安山岩	19.9	15.8	5.6	2580		一部剥落
	50	B - 19	下	石皿	安山岩	26.2	15.4	12.4	6300	7	
	51	A - 19	下	石皿	安山岩	18.0	15.6	2.7	1300	339	
	52	2 T	下	石皿	凝灰岩	16.8	10.2	4.8	1310	1107	

28～30は円筒形土器（型式不明）の胴部片である。28・29は同一個体で，外面に条痕，内面にナデを施す。器肉が厚く，胎土に石英，砂粒を多く含む。30は外面に横位の条痕文が残る。

31～33は底部である。31は外面に貝殻条痕文を施す。砂粒の少ない比較的精製された胎土を使用している。32は外面がミガキ調整で，胎土に金雲母を多く含む。桑ノ丸式土器の可能性がある。33・34は磨滅が著しい。

縄文時代前期

36は，3号トレンチのアカホヤ上層で出土した。胴部外面に縦位及び斜位の沈線文を施している。器壁が薄く，内外面ナデ調整を施す。曽畑式土器での範疇で理解している。

(2) 石 器

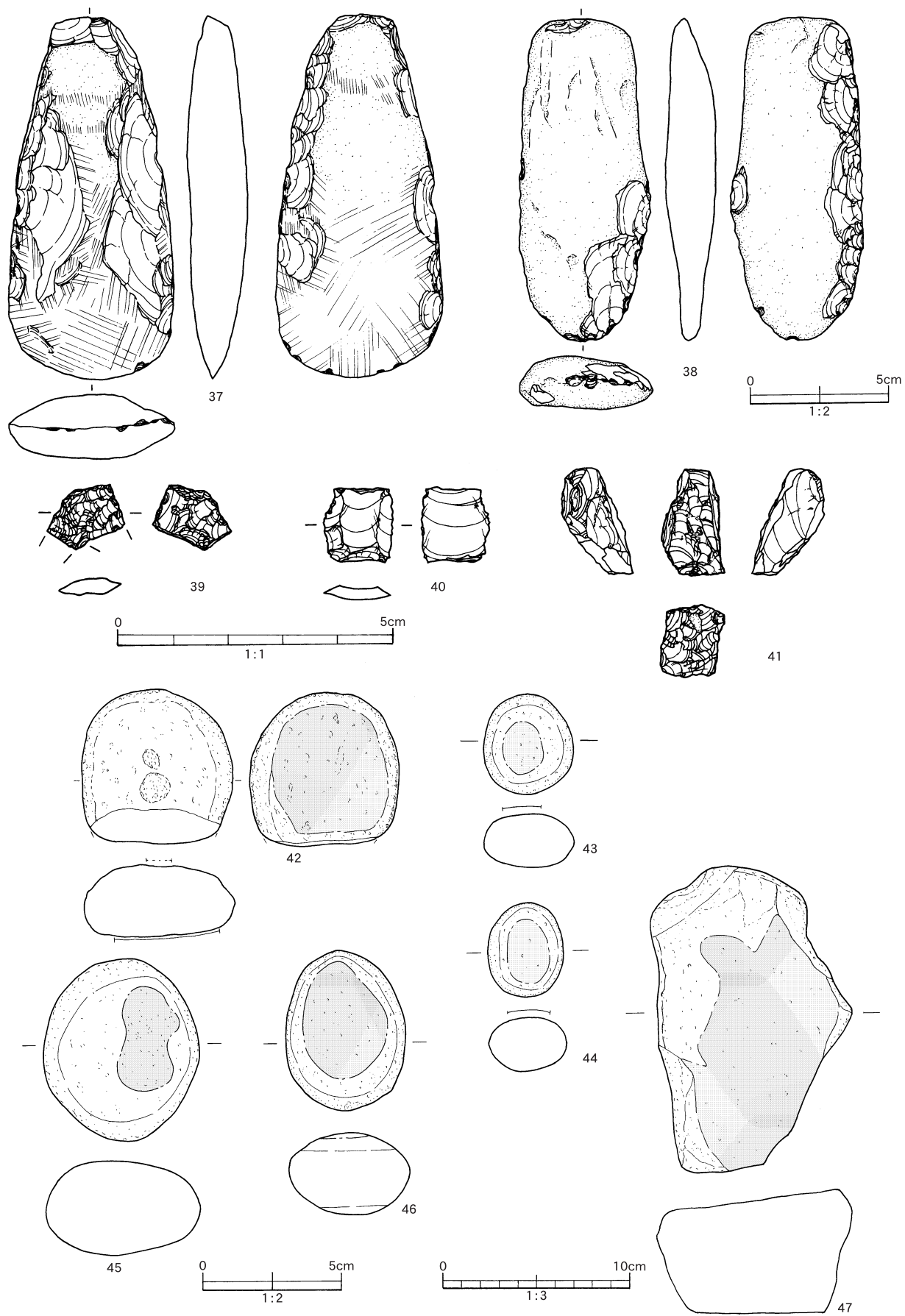
石斧，石鏃未製品，残核，磨石，敲石，石皿が出土した。

37は砂岩，38はホルンフェルス製の石斧である。37は撥形を呈し，側辺と基部を打ち欠いて形を整えた後，研磨している。38は扁平な自然礫を利用したものである。長方形を呈し，右側辺を打ち欠いて刃部を形成している。

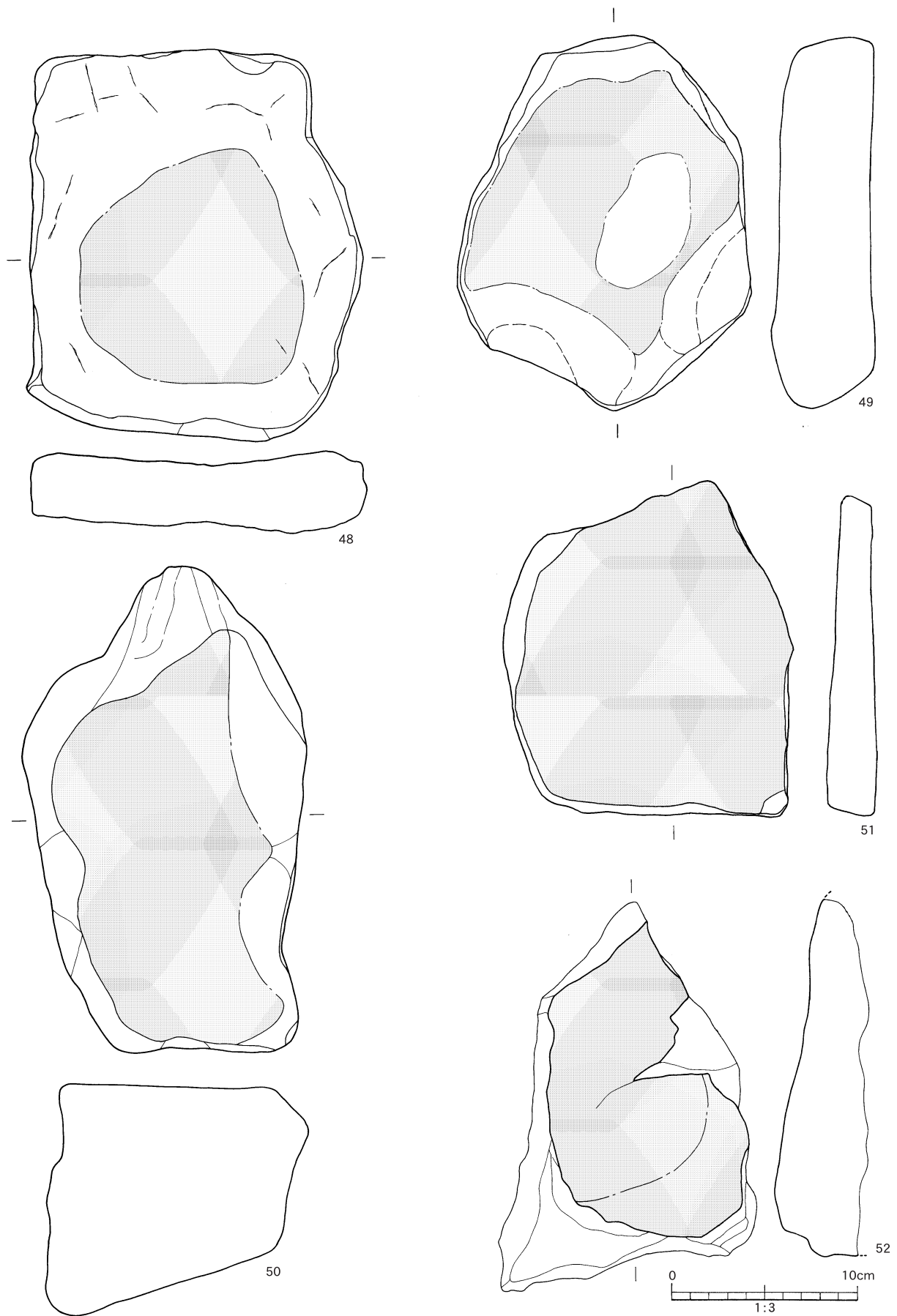
39は打製石鏃の欠損品で，未製品の可能性もある。40は頁岩，41は黒曜石の残核である。この他に，黒曜石製19点，水晶製1点，チャート製1点の剥片が出土している。

42は磨・敲石である。表面に敲打痕，裏面に磨面が残る。43～46は安山岩製の磨石で，片面にのみ磨面を形成している。

47～52は，安山岩と凝灰岩製の石皿である。48は表面が焼けており，煤が付着している。



第17図 縄文時代早期石器 1
(37・38・42～46 1/2, 39～41 1/1, 47 1/3)



第18図 縄文時代早期石器 2

第4節 古代・中世の調査成果

1 調査の概要

本調査では、第1地点及び第2地点（A～D・2～13区）で、古代・中世の遺構・遺物が検出された。両地点ともに重機で表土を掘り下げ、層以下を人力で掘り下げた。第2地点の調査は拡幅部分を行った後、迂回路を設置して現道下の調査を行った。C・4区以北は、近代以降の道跡によって層まで削平されており、古代・中世の道跡は残っていなかった。

第1地点では、古代の道跡と考えられる遺構が2条検出され、遺物は土師器の碗と甕、鉄器が出土した（第19図）。第2地点では、溝状遺構群が1か所、道跡が56条、溝状遺構が7条検出され、遺物は土師器の碗、杯、陶器碗が少量出土した（第20図）。

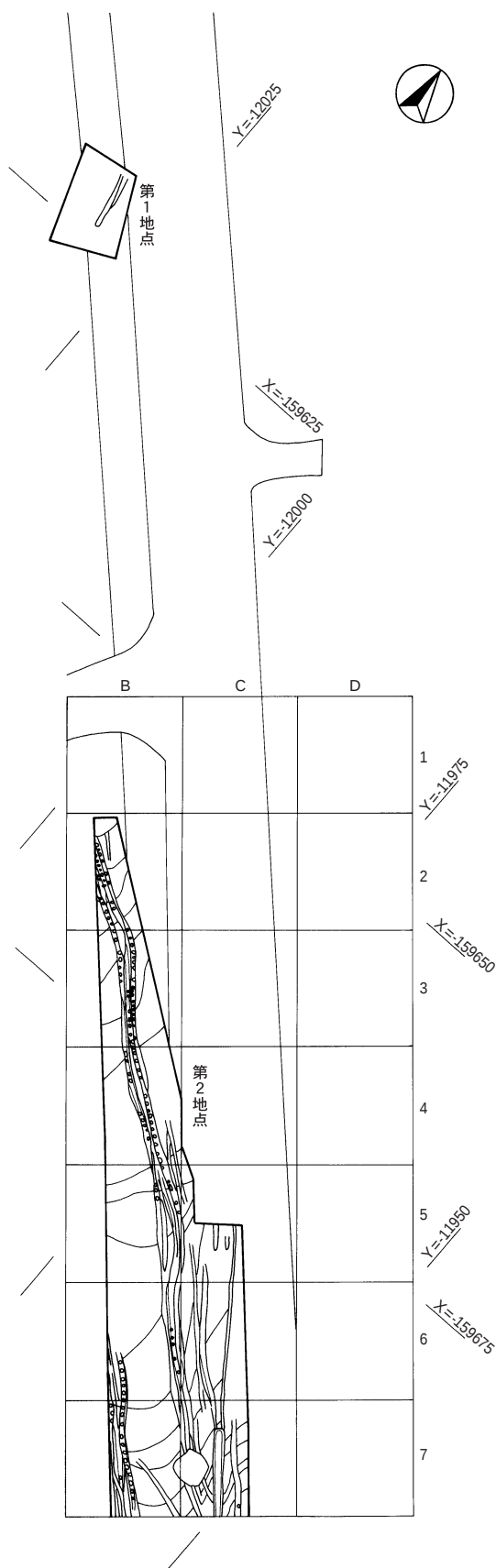
第1地点と第2地点を合わせた調査面積は約1,800㎡である。

2 遺構

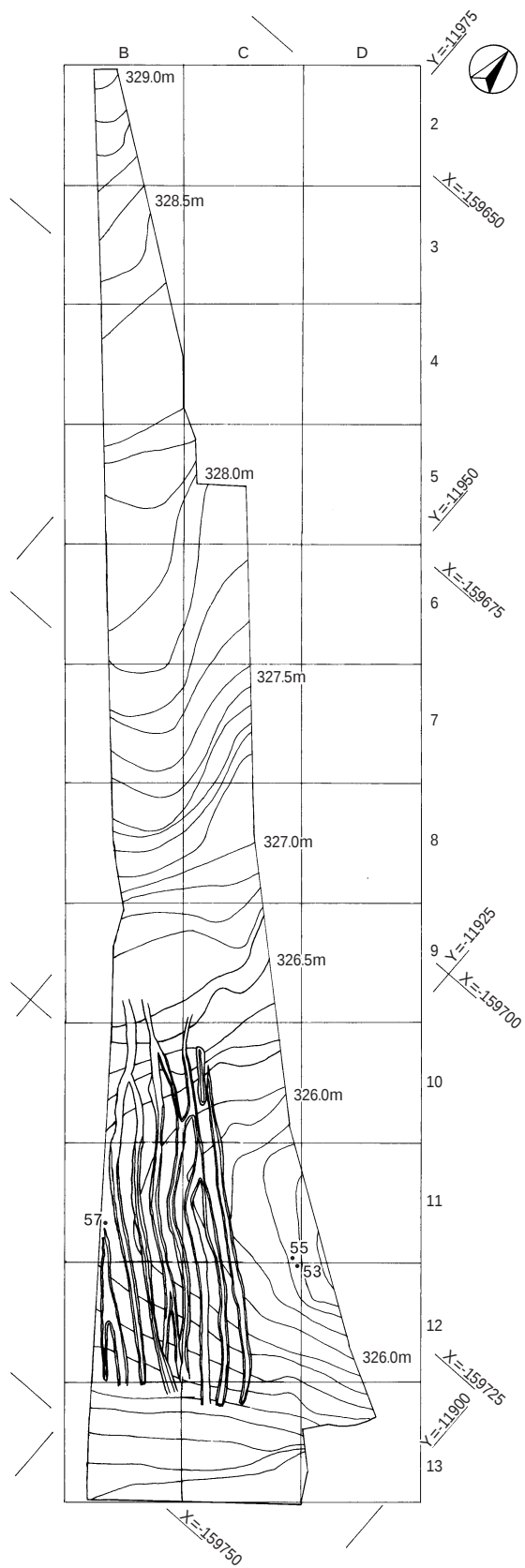
(1) 溝状遺構群（第21、22図）

BC・10～12区の層上面で検出した。検出面は、道跡より下位であり、溝状遺構が谷状の地形に直交する形で南北方向に10条並んでいる。溝の幅は約60cm～80cm程度で、深さは5cm～16cmである。断面の状況を見ると、底面が浅いレンズ状をなしており、埋土は灰褐色の砂質土で、上部から検出された道跡の埋土と比較するとかなり柔らかく締まりも弱い。溝状遺構内で遺物は検出されていないが、周辺では土師器が3点出土した。

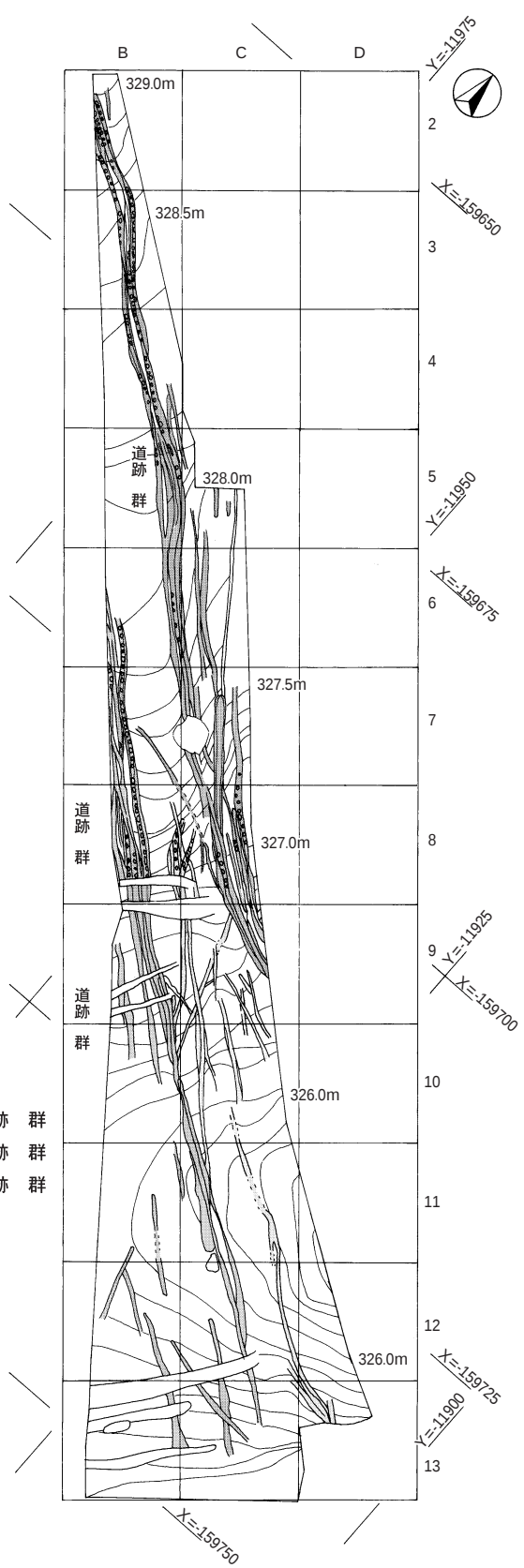
溝跡は、同一方向へ約90cm～100cm程の間隔でほぼ並行に並んでいることから、畝跡の可能性を考え、土壌のプラント・オパール分析を行った。その結果、イネある



第19図 第1地点遺構配置図
(1 : 600)

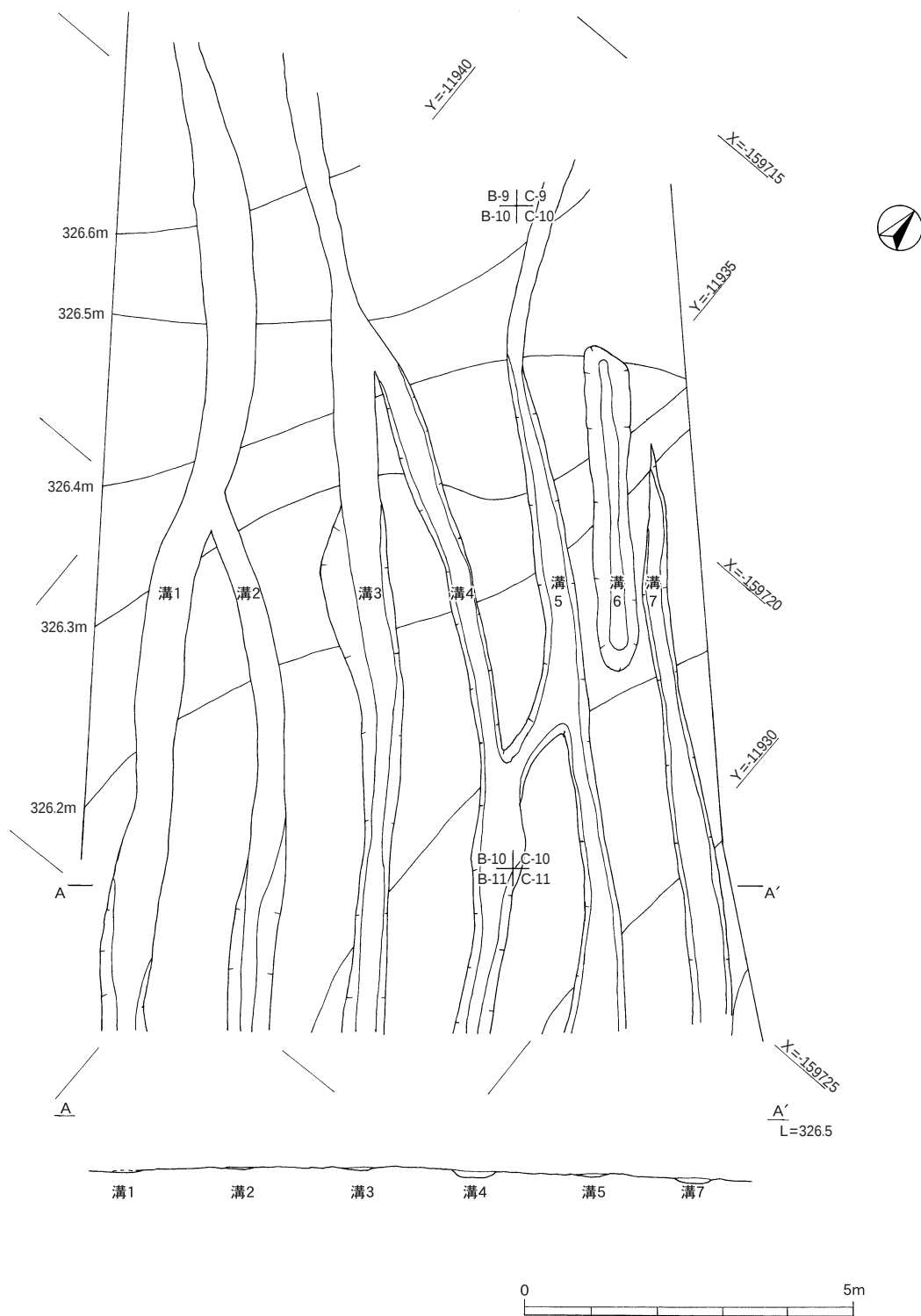


溝状遺構

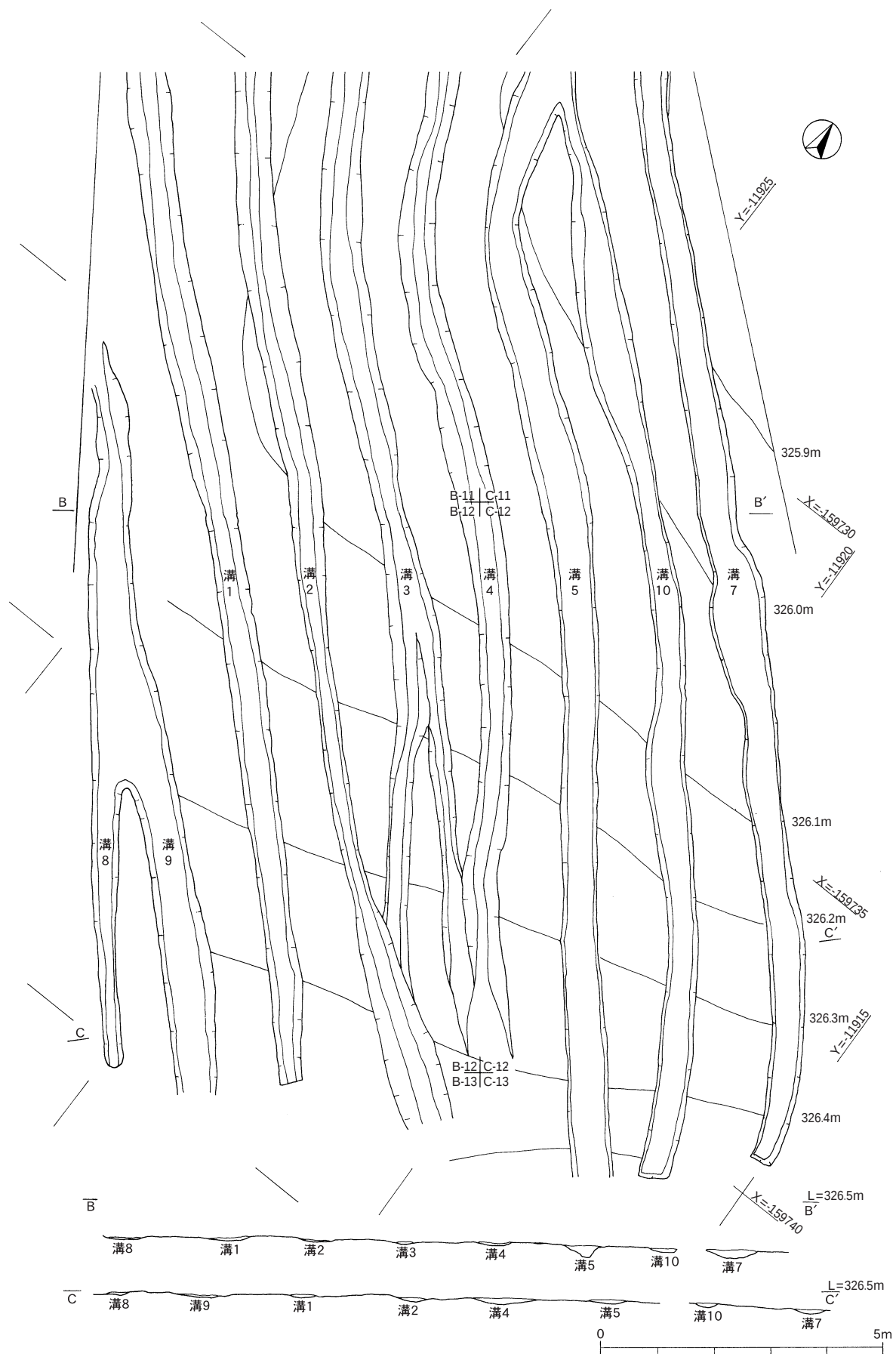


道跡

第20図 第2地点遺構配置・遺物出土状況図 (1 : 600)



第21図 溝状遺構群 1 (1 : 100)



第22図 溝状遺構群 2 (1 : 100)

いはキビ族の栽培が行われていた可能性はあるものの、溝状遺構内で採取した試料 1・2 の分析結果にバラツキがあり、さらに比較試料として採取した壁面試料との間に明確な差異がないことから、畠跡とは断定できなかった。

(2)道跡

層から古代～中世の道跡が総数58条検出された。第 1 地点では、道跡が 2 条検出され、北側へ続くと予想されるが、耕作による攪乱により、10m 程度しか検出されなかった。第 2 地点では、B C - 2 ～ 13 区で道跡が 56 条検出され、長いもので 60m 以上続くものもあるが、断続的なものがほとんどである。道幅は、30cm ～ 40cm 程度のものが中心で、80cm ～ 100cm 程の幅広のものもある。

切り合いの状況や方向を踏まえると、大きく 群、 群、 群の 3 つの道跡群に分けることができる（第 20 図）。 群と 群は道跡が数条ずつ重なって構成されているが、両群の間に散在する群は道跡の重なりはほとんどない。 群と 群間の距離は約 5 m で、北西 - 南東の方向へほぼ並行して伸びており、 群は、B C - 8 ～ 12 区で部分的に検出され、一部は 群につながっている。 群が 21 条、 群が 18 条、 群が 19 条の道跡で構成されている。

基本的にほとんどが硬化面を形成し、それらの残存を確認することで道跡と判断した。厚さは 2 cm ～ 4 cm 程度で、下部に鉄分が沈殿している。硬化面は砂層を挟んで 4 枚以上に分かれ、埋没を繰り返しながら断続的に形成されている。

特徴として、道跡には波板状痕跡があり、どの道跡群でも、ほぼ同じ部分で確認できた。ほとんどが直径 30cm ～ 40cm 程度の楕円形であり、深さは 10cm 程度である。

波板状痕跡の断面を見ると、かなり締まった硬化面が何層も確認できた。特に道跡群、 が最も接する B - 8 区は、多くの波板状痕跡が検出された。地形と照合すると、勾配が急である地点に集中していることが分かる。勾配が緩やかな部分でも確認はされたが、その硬化面は締まりが弱く、深さも僅かに確認できる程度であった。なお、道跡に伴う出土遺物は確認されていない。

道跡については、検出された数が多いため、2 グリッドずつ区切って報告する。

第 1 地点

道跡 1, 2（第 23 図）

第 1 地点では 2 条の道跡が検出された。道跡 1 は幅が 30cm で厚さが 3 cm、道跡 2 は幅が 60cm で厚さ 7 cm であり、ともに底面は浅いレンズ状を成す。底面にはっきりとした硬化面は確認できなかった。埋土は、道跡 1 が黒褐色で固く締まっており、道跡 2 は黒色で道跡 1 よりはやや柔らかい。道跡 1 が道跡 2 を切っており、道跡 2 の後に道跡 1 が形成されたと考えられる。

また、第 2 地点の道跡との関係については、道跡 13, 14 とつながる可能性が高く、 群に属すると予想される。

第2地点

B-2, 3区 道跡3～7（第24図）

道跡群に属する道跡3・4～7が5条重なって検出された。全長は3m～47mで、全ての道は調査区北側までさらに伸びていくことが予想される。幅は30cm～65cmで、検出面からの深さは3cm～10cmである。5条とも底面は浅いレンズ状をなしており、埋土は層（層）の黒色土と、層の暗灰色土による硬化面に分層される。道5においては層の中部に鉄分層の水平堆積が確認でき、下面には赤色化した鉄分の沈殿が見られる。掘り込みが深い道跡7の波板状凹凸部分は、層と層の灰色砂質土に分層される。

切り合いと断面から判断すると、道跡4と6の形成後、その上を道跡5と7が形成されている。それぞれが対となって、同じ方向に並行して検出されていることからほぼ同じ時期のものと考えられる。道跡は、西側へ緩やかなカーブを描くように伸びており、現在の櫛久保集落方面へ続くことになる。

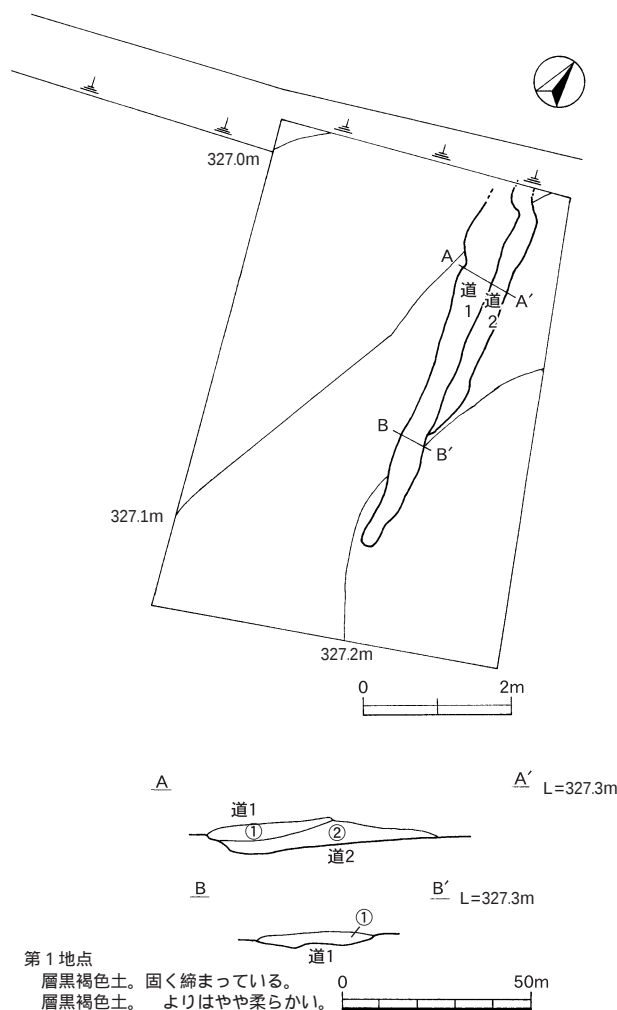
また、道跡4～7では等間隔に凹凸部分が検出されたため、波板状遺構として調査を進めた。上面は楕円形を呈し、径が30cm～50cm、深さが5cm程度で、下部は灰褐色砂質土による非常に固い硬化面が確認された。また、この範囲内で確認された凹面の芯々距離は平均約70cmである。

B-4, 5区 道跡8～14（第25図）

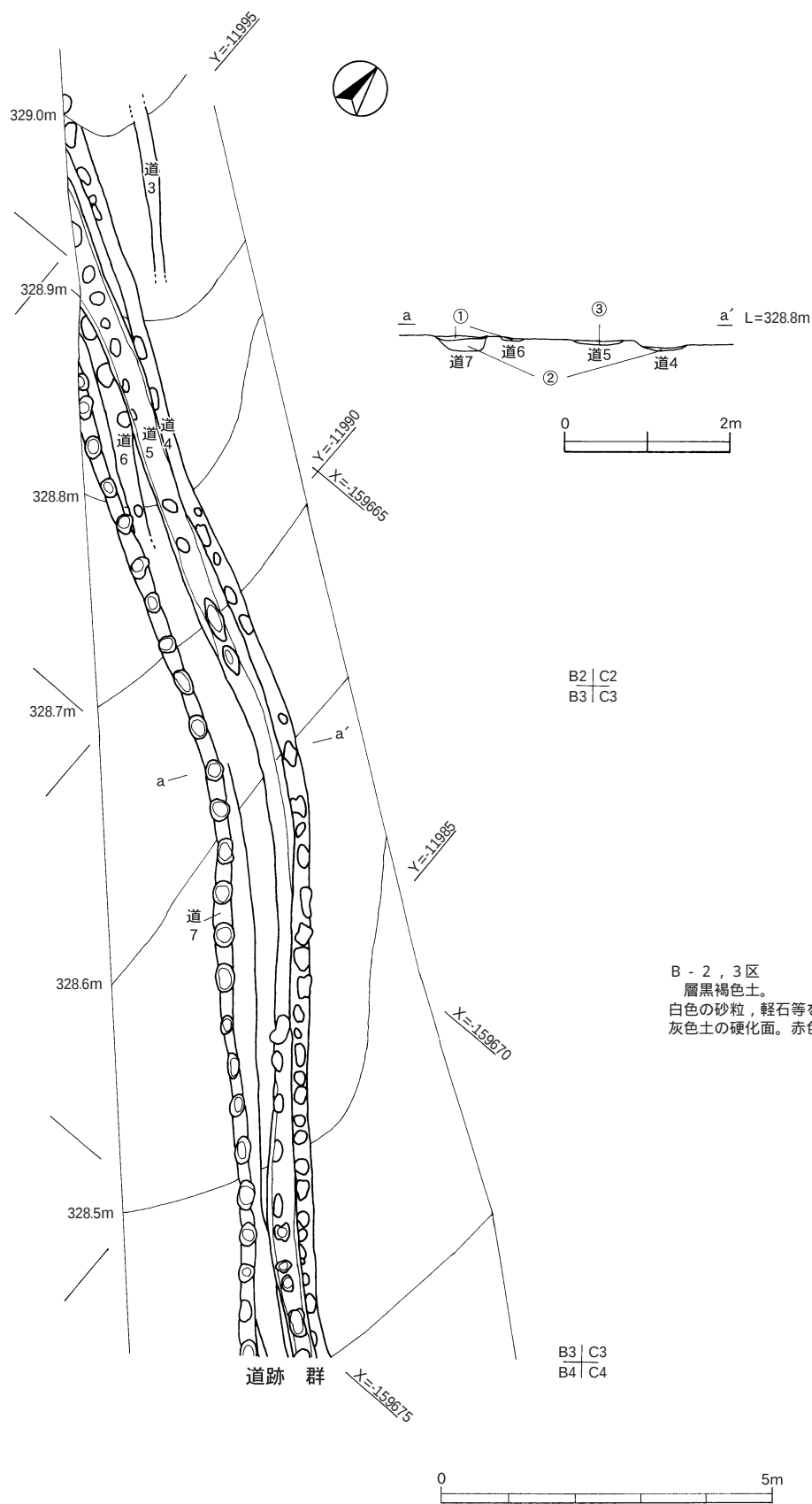
いずれも道跡群に属し、北西へと伸びている。全長は4m～46mで、全ての道は調査区外までさらに伸びていくことが予想される。幅は30cm～65cmで、検出面からの深さは6cm～10cmである。埋土は、それぞれの道跡で異なり、2層から3層に分けられる。

切り合いから判断すると、道跡12が最も古く、その後、道跡4・6・9・10・5・7と続き、11が最も新しく形成された道跡である。

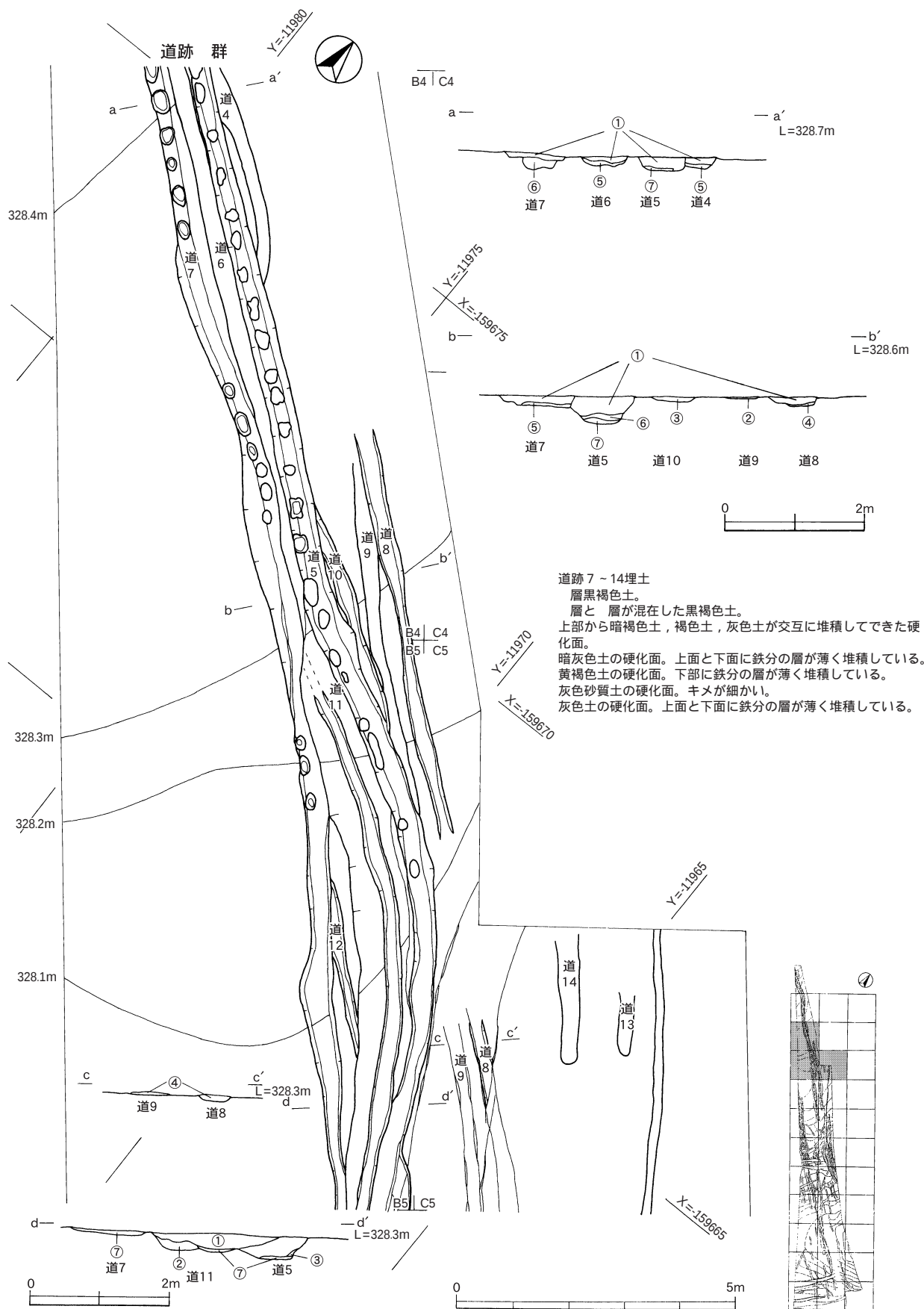
波板状痕跡については、道跡11で確認され、芯々距離の平均は72cmである。



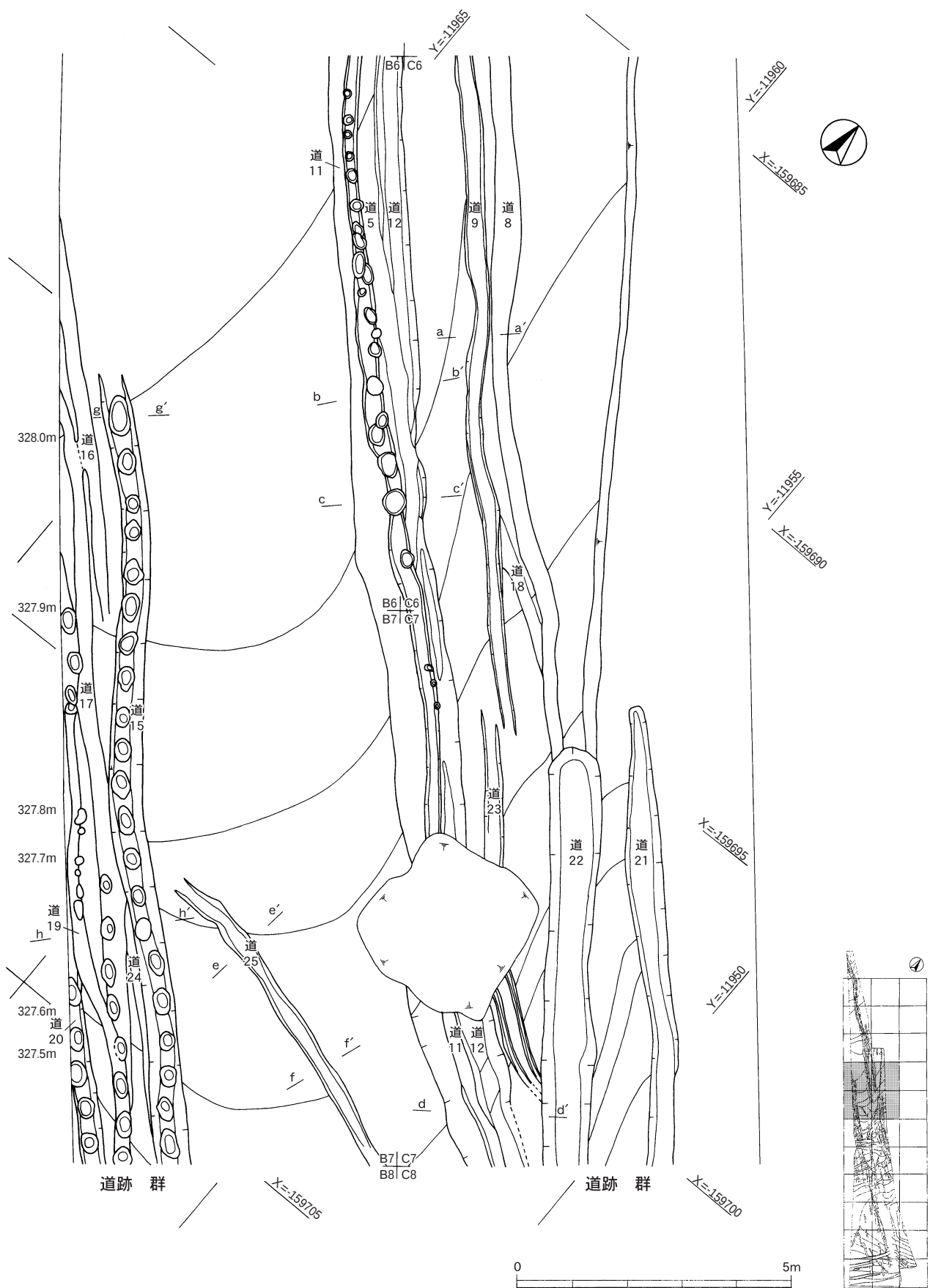
第23図 第1地点検出遺構（道跡1, 2）



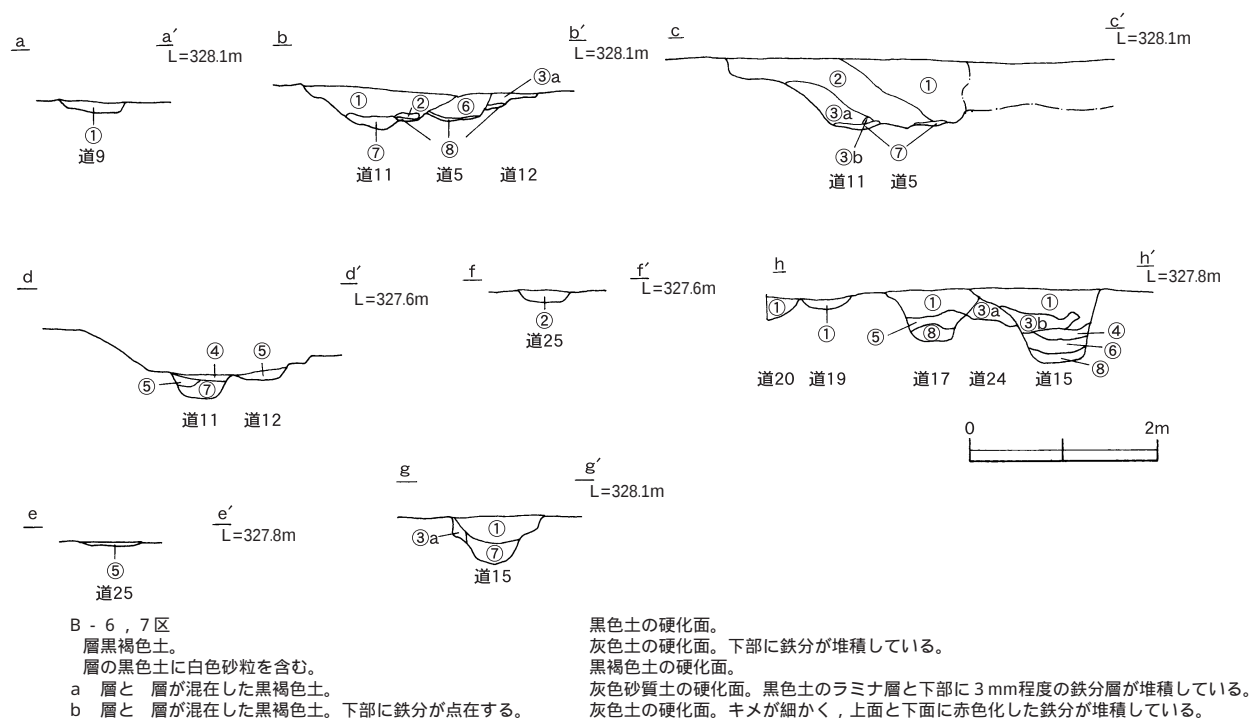
第24図 検出遺構（道跡3～7）



第25図 検出遺構（道跡8～14）



第26図 検出遺構 (道跡15～25)



第27図 道跡5～25断面

B - 6, 7区 道跡15～25 (第26, 27図)

道跡18, 21～24は道跡群に属し, 道跡15～17, 19・20は道跡群, 道跡25は道跡群に属する。全長は3m～63mで幅は25cm～100cmと, 規模の差が大きい。検出面からの深さは, 道跡5・11・12が重なり合う部分で35cmと最も深く, ほかは3cm～12cmと浅い。群で最も深い道跡15の波板状凹凸部分は5つに分層され, 最下部に堆積する層の灰色砂質土の硬化面はかなり固く締まっており, 赤色化した鉄分の層がはっきりと確認できた。

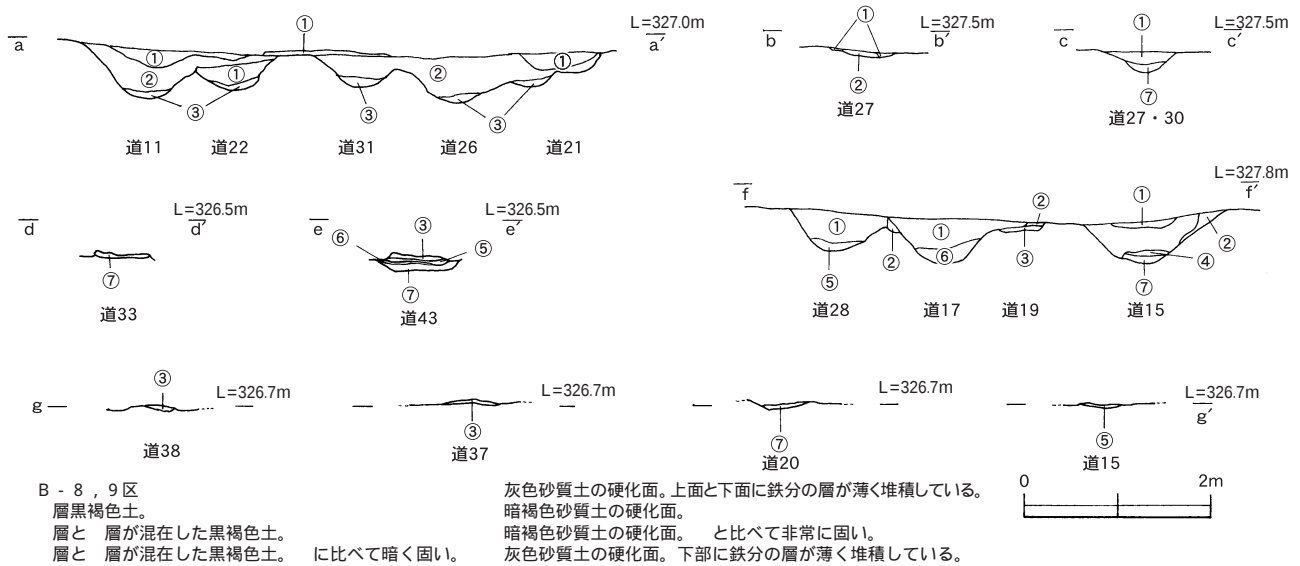
群道跡の新旧関係は, 切り合いと断面から判断すると, 道跡24が最も古く形成され, その後, 道跡17・15・19・20と続いている。

波板状痕跡については, 道跡15で特に多く確認された。芯々距離は, 平均69cmとやや狭まっている。凹みも最も深いもので25cmあり, B C - 5区以北で検出されたものと比較すると凹凸が著しい。

B - 8, 9区 道跡26～49 (第28, 29図)

道跡26・31は道跡群に属し, 道跡28～30・33・37～40は道跡群に属する。道跡群は道跡27・32・34～36・41～49と多く検出された。群に属する道跡の全長は1.5m～5.5mと短く, 検出面からの深さは3cm～4cm程度と浅い。

群の道跡は北西に向かって伸びており, B C - 8区付近で途絶えている。道跡同士の重なりは少なく, ほとんどが単独で検出された。また, 波板痕跡も確認されなかった。



第29図 道跡11～43断面

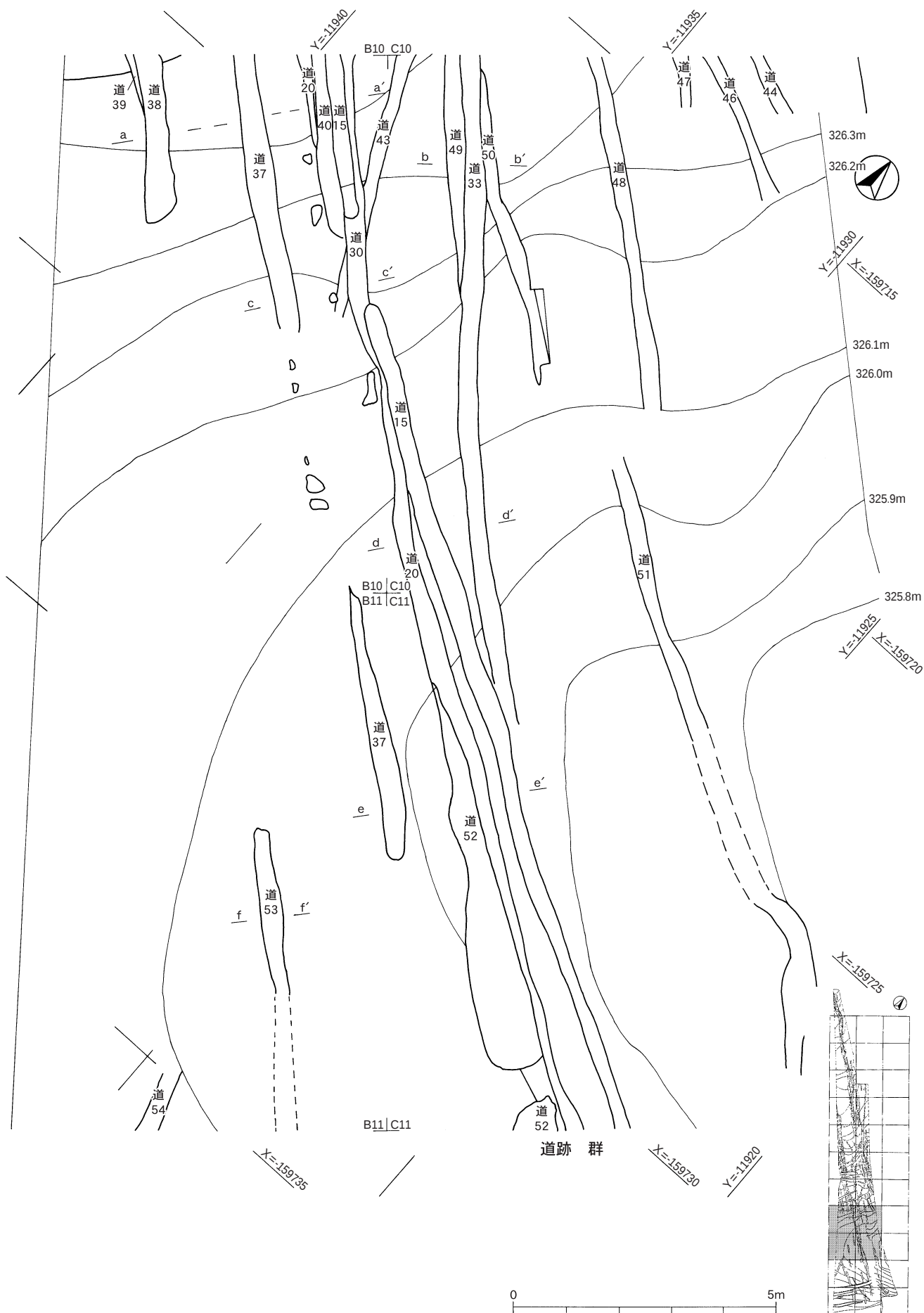
B - 10, 11区 道跡50～54 (第30, 31図)

道跡52～54は道跡 群に属し、道跡50・51は道跡 群に属する。全長は短く途切れたものが多いが、道跡52と40, 53と38は検出レベルや硬化面の状態から連結する可能性が高い。幅は35cm～110cm、検出面からの深さは2cm～4cm程度と浅く、硬化面は 層の黒褐色砂質土がやや固まった状態のもの(層)が多く、B C - 9区より北でみられる灰褐色を呈する固く締まった硬化面は、ほとんど確認できなかった。この地区は浅く窪んだ谷状の地形であり、流水等の影響もあって硬化面の残りが悪いと考えられる。切り合いの関係をみると道跡49と50が古く、他はほとんど単独で検出された。

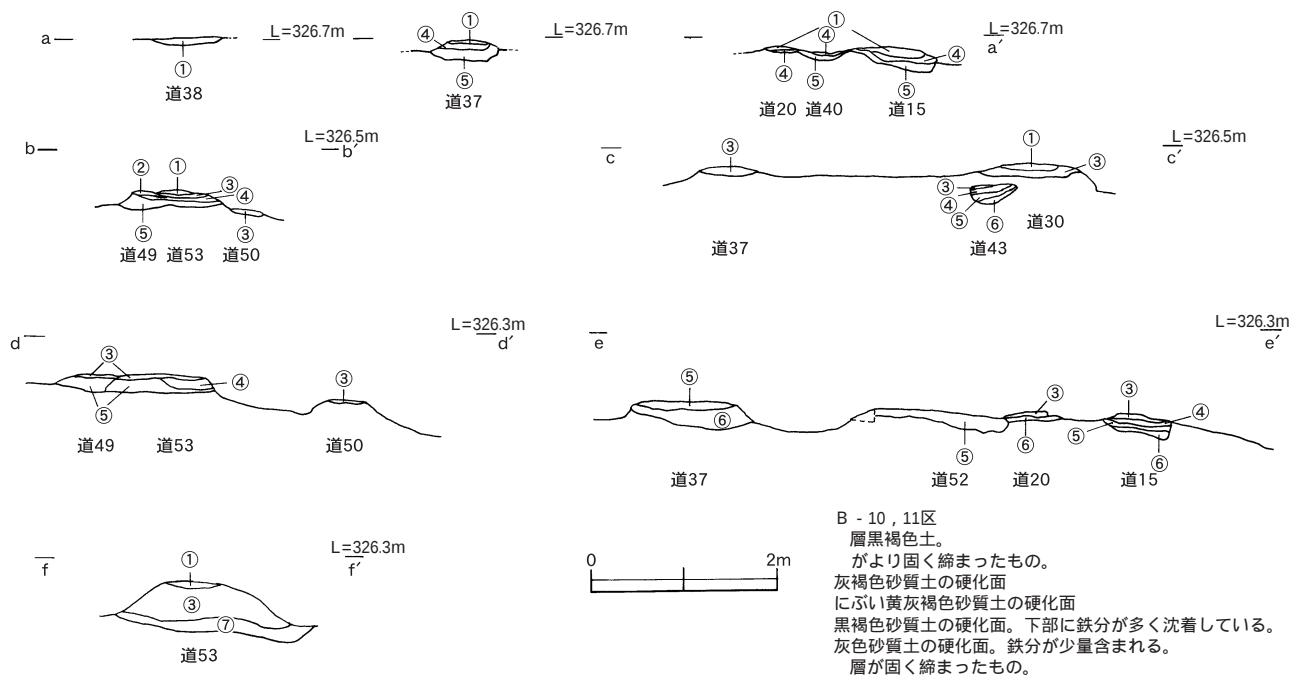
道跡51は、全長が20mと比較的長い方である。 群と同一方向であることから、 群内の道跡に連結する可能性を考えたが、平面上で確認することができなかったので 群に属するものとした。

B - 12, 13区 道跡55～58 (第32, 33図)

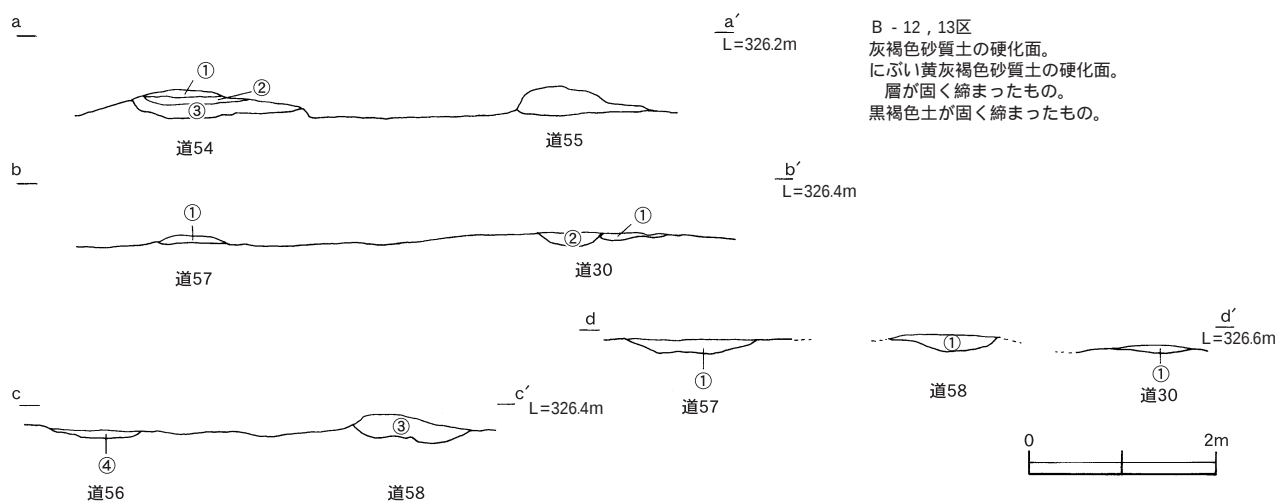
第2地点の最南部では、幅が30cm～70cmで、検出面からの深さが2cm～6cmの道跡が4条単独で検出された。全て道跡 群に属し、全長は5.5m～12mと短い。道跡の底面は平坦で、埋土は 層の灰褐色砂質土が硬化した層が多く見られ、はっきりとした 層のにぶい黄灰褐色砂質土の硬化面は僅かしか確認できなかった。



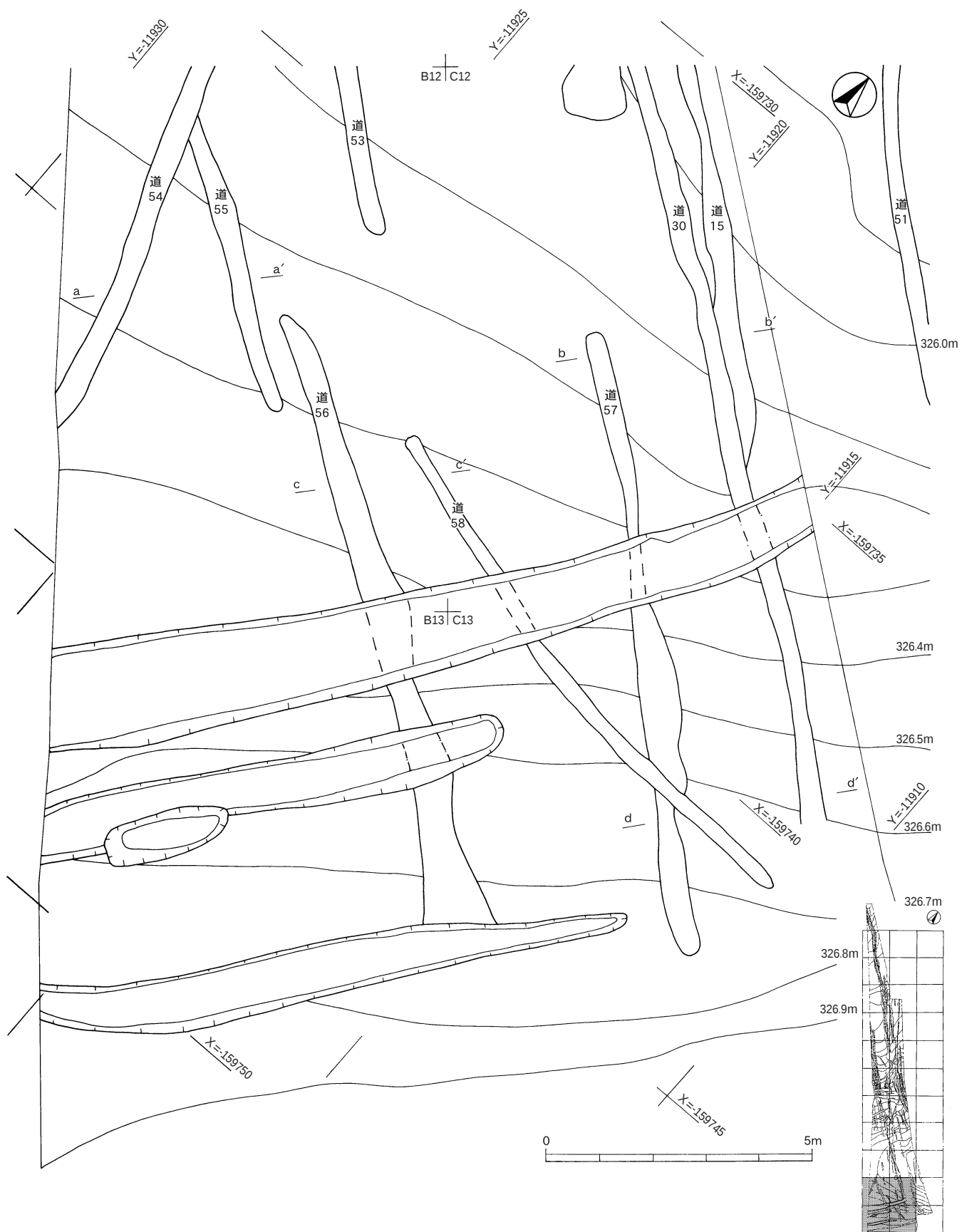
第30図 検出遺構 (道跡50～54)



第31図 道跡15～53断面



第32図 道跡30～58断面



第33図 検出遺構 (道跡55~58)

(3)溝状遺構（第34図）

道跡群を横切るように東西方向へ溝状遺構が検出された。検出面は 層で、切り合いを見ると道跡を切っており、道跡より新しいことが分かる。また、遺構内で遺物は検出されなかった。

溝跡11, 12

B - 8・9区で検出された。溝跡11は横幅が最大100cm、溝跡12は最大50cmで、検出面からの深さは両者とも5cm程度と浅い。埋土は 層の黒色土で硬化面は見られない。

溝跡13, 14

B - 9区で検出された。溝跡13は横幅が最大80cm、溝跡14は最大70cmで、検出面からの深さは7cm～8cmである。硬化面はみられなかったが、完掘後の状況は道跡に類似しており、頻繁ではないが道として利用していた可能性もある。

溝跡15～17

B - 13区で検出された。溝跡15は他の溝跡と比較して規格が大きく、横幅が最大200cmで、検出面からの深さは10cmである。埋土は 層の黒土で、硬化面は確認されなかった。溝跡16は横幅が最大110cmで、検出面からの深さは8cm、溝跡17は横幅が最大100cmで、検出面からの深さは約7cmである。いずれも埋土は 層の黒色土で、溝跡13, 14と比較すると埋土の締まりも弱く、硬化面は確認されなかった。

(4)土坑

B - 13区で検出された。溝跡16を切っている。縦幅2m、横幅70cm、深さ10cmの楕円形を呈している。埋土は 層の黒色土で、遺物は検出されなかった。

3 遺物

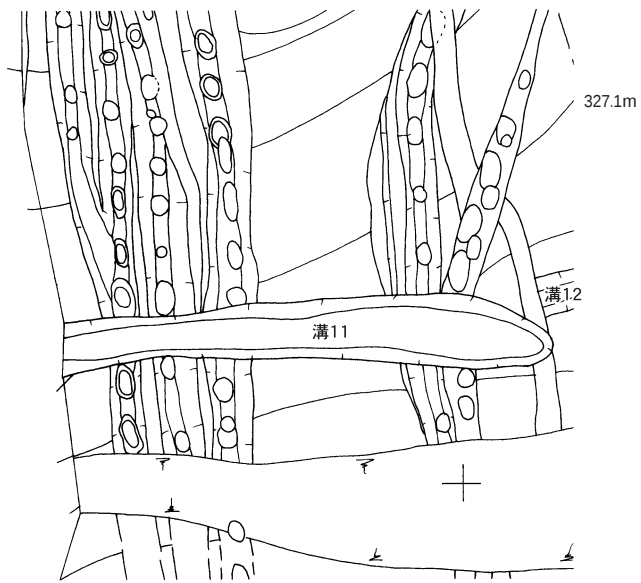
(1)土師器

第1・2地点の 層では、古代の土師器、鉄器が少量出土した。この他に、 層上部では近世の陶器碗が出土している。

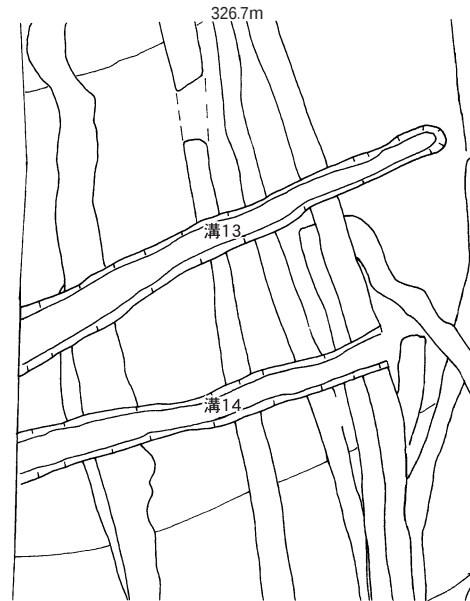
53は土師器の碗で、ほぼ完形品である。短く直立する高台から、体部が直線的に開き、内外面横ナデ調整を施す。高台の天井面は、ヘラ切りによって切り離された後、丁寧になでられている。内面には赤色顔料が塗られ、外面には3本の線刻がみられる。D - 12区 層で、まとまって出土した。54～56は土師器碗の底部である。54・56は第1調査地点の出土で、内面に赤色顔料を確認できる。内外面の磨滅が著しい。57は坏の底部である。内面に黒色研磨を施している。

58～60は土師器の甕である。外面はナデ調整、内面はケズリ調整である。59・60は第1調査地点 層出土。

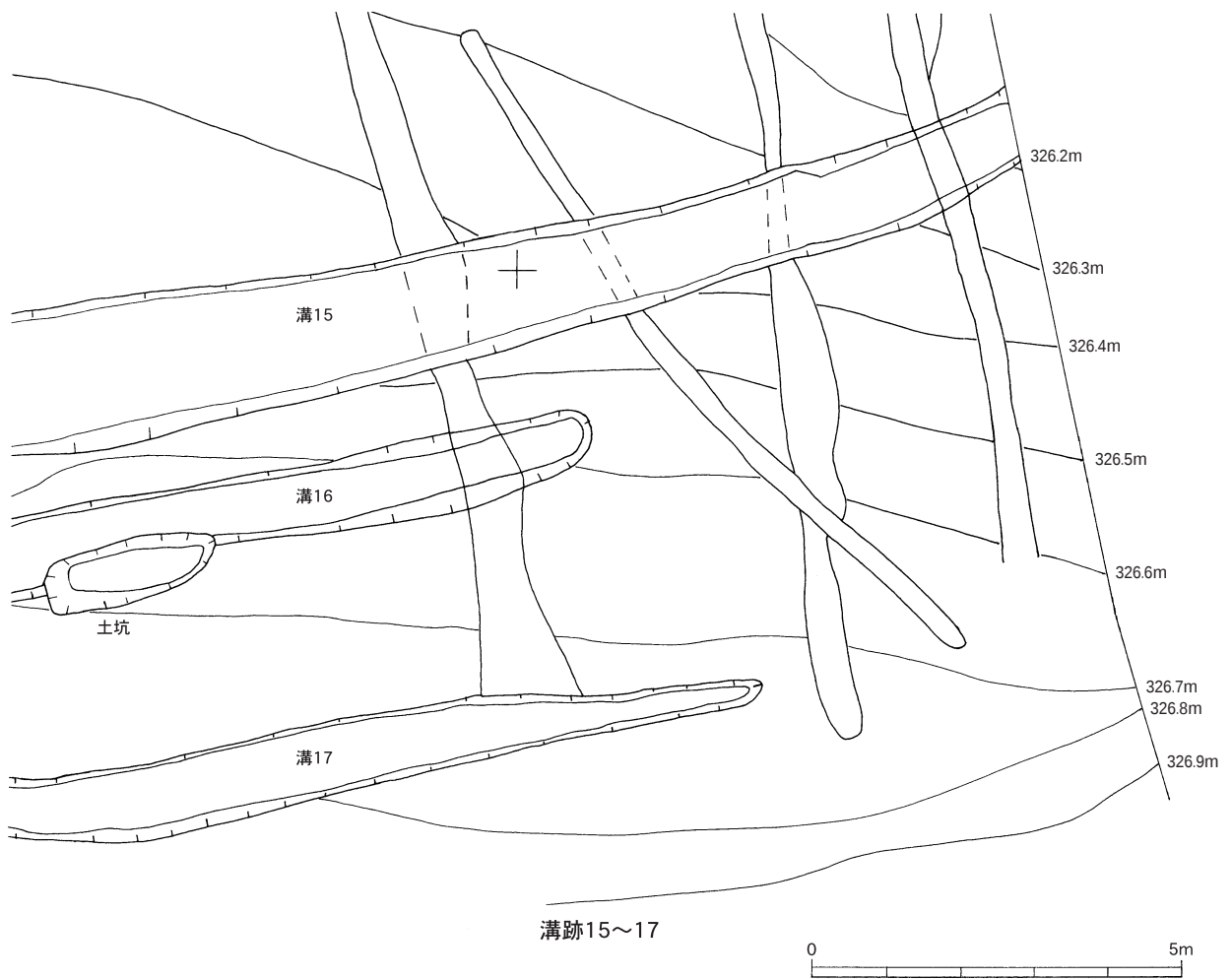
61は近世陶器の碗である。外面には褐色の釉薬がかかっている。胎土は緻密で砂粒を含まず、灰色を呈している。5号トレンチ 層上部で出土。



溝跡11, 12

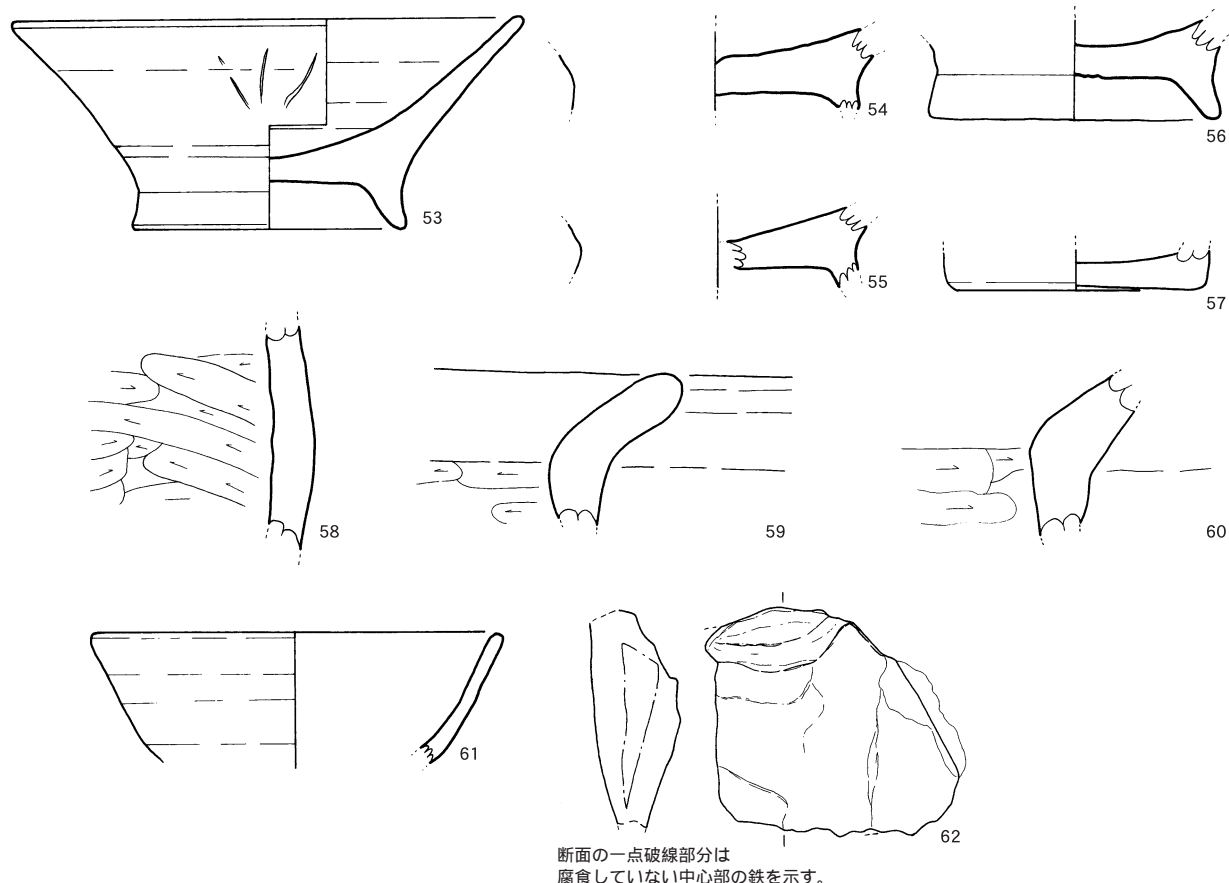


溝跡13, 14



溝跡15~17

第34図 検出遺構（溝状遺構）



第35図 古代・中世出土遺物

第7表 古代・中世出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整		色調等		取上番号	備考
									外	内	外	内		
35	53	D - 12		碗	完形	13.6	7.4	5.6	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	赤	163・165 166・167	内面に赤色顔料
	54	第1地点		碗	底部			2.2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	赤	-	内面に赤色顔料
	55	D - 11		碗	底部			2.2	回転ナデ	磨滅	浅黄橙	浅黄橙	168	
	56	第1地点		碗	底部		7.8	2.7	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	赤	-	内面に赤色顔料
	57	B - 11	・ 上	坏	底部		6.4	8.0	回転ナデ	ミガキ	浅黄橙	黒	1・3	内面黒色研磨
	58	11T		甗	胴部				ナデ	ケズリ	褐	褐		外面煤付着
	59	第1地点		甗	口縁			4.1	ナデ	ケズリ	褐	褐		
	60	第1地点		甗	頸部			4.3	ナデ	ケズリ	褐	褐		
	61	5T	上	陶器碗	口縁(11)			3.4	回転ナデ	回転ナデ	褐色の釉薬がかかる			
	62	第1地点		鉄器	不明	縦6cm, 横6.6cm, 重さ178.5g			-		-			

(2)鉄器

62は第1地点 層で出土した鉄器である。層状剥離を起こし、かなり膨れ上がっているが、中心部には鉄が良好に残っており刃部を作っていることが確認できる。上部の一部が凹んでおり、厚みのある作りである。利器の一部と考えられるが、具体的な用途は不明である。

第Ⅳ章 プラント・オパール分析

1. はじめに

堂原遺跡において行われた発掘調査で、畠跡の可能性が推測されている溝状遺構が検出された。時期は9～10世紀と考えられている。こうしたことから畠跡の是非と栽培植物の検討を目的にプラント・オパール分析を行った。

2. 試料と分析方法

分析用試料はB - 1区畠跡： 溝（試料1）、C - 12区畠跡： 溝（試料2）およびC - 9区北壁 層（試料3）の3試料である。各試料について、試料1、2は黒褐色の砂質シルト、試料3は暗灰色のシルト質砂である。プラント・オパール分析はこれら3試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約0.04mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20cc～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパレートを作製し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが400個に達するまで行った。

3. 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め（表1）、それらの分布を図1に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、試料2、3の2試料からイネのプラント・オパールが検出され、個数はいずれも3,000個であった。最も多く検出されたのはネザサ節型で、試料3では180,000個を越えている。ウシクサ族も多産しており、試料1、2ではネザサ節型より多い60,000個前後を示している。キビ族も20,000個前後と、珪酸体の生産能力が低いキビ族としては非常に高い数値を示している。その他、クマザサ属型やシバ属などが検出されている。

表1 試料1g当たりのプラント・オパール個数

試料番号	イネ （個/g）	ネザサ節型 （個/g）	クマザサ属型 （個/g）	他のタケ亜科 （個/g）	シバ属 （個/g）	キビ族 （個/g）	ウシクサ族 （個/g）	不明 （個/g）
1	0	56,800	7,800	1,600	0	16,300	76,300	9,300
2	3,000	31,900	2,300	1,500	800	28,100	60,700	10,600
3	3,000	181,600	0	3,800	800	16,700	32,700	17,500

4. 畠跡の是非と栽培植物について

上記したように、2 試料でイネのプラント・オパールが検出された。ここでイネの検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、イネのプラント・オパールが試料 1 g 当り 5,000 個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原 1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの 5,000 個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。



図 1 堂原遺跡のプラント・オパール分布図

今回の分析においては試料 2, 3 においていずれも 3,000 個のイネのプラント・オパールが検出されており、上記から稲作が行われていた可能性は低いとプラント・オパール分析からは判断される。しかしながら溝状遺構の直上より多数の道跡が見つかっており、溝状遺構の上部は道跡により削平されていることも考えられている。こうしたことからイネのプラント・オパール密度の高い部分が削られている可能性も考えられる。また得られたイネの機動細胞珪酸体はかなり新鮮な様相を示しており、あまり移動していない、すなわち現地性が高いと思われる。こうしたことから検出個数はやや少ないながら極近辺において稲作が行われていた可能性はあるように思われる。

一方、キビ族も多く検出されており、先にも記したがキビ族としては高い検出個数を示している。こうしたことからアワ、ヒエ、キビといったキビ族が栽培されていた可能性も推測される。しかしながらキビ族についてはその形態から上記の栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、イヌビエなどの雑草類によるものかについて分類できないのが現状である。写真図版の写真番号 7 は形態的にはヒエの可能性があるとされるが一方でイヌビエの可能性もあるように思われる。このように断定は出来ないものの栽培種とみられる個体が観察され、検出個体数も非常に多いことからキビ族についても栽培されていた可能性はあるように思われる。

以上のようにイネやキビ族が栽培されていた可能性が推察されるが、両方とも栽培されていたか、片方のみかといった様相については不明である。片方、すなわちキビ族が栽培されていたとするとイネのプラント・オパールは肥料として稲藁が利用されることによって供給されたことが考えられ、

稲作が行われていたとするとその逆が考えられよう。

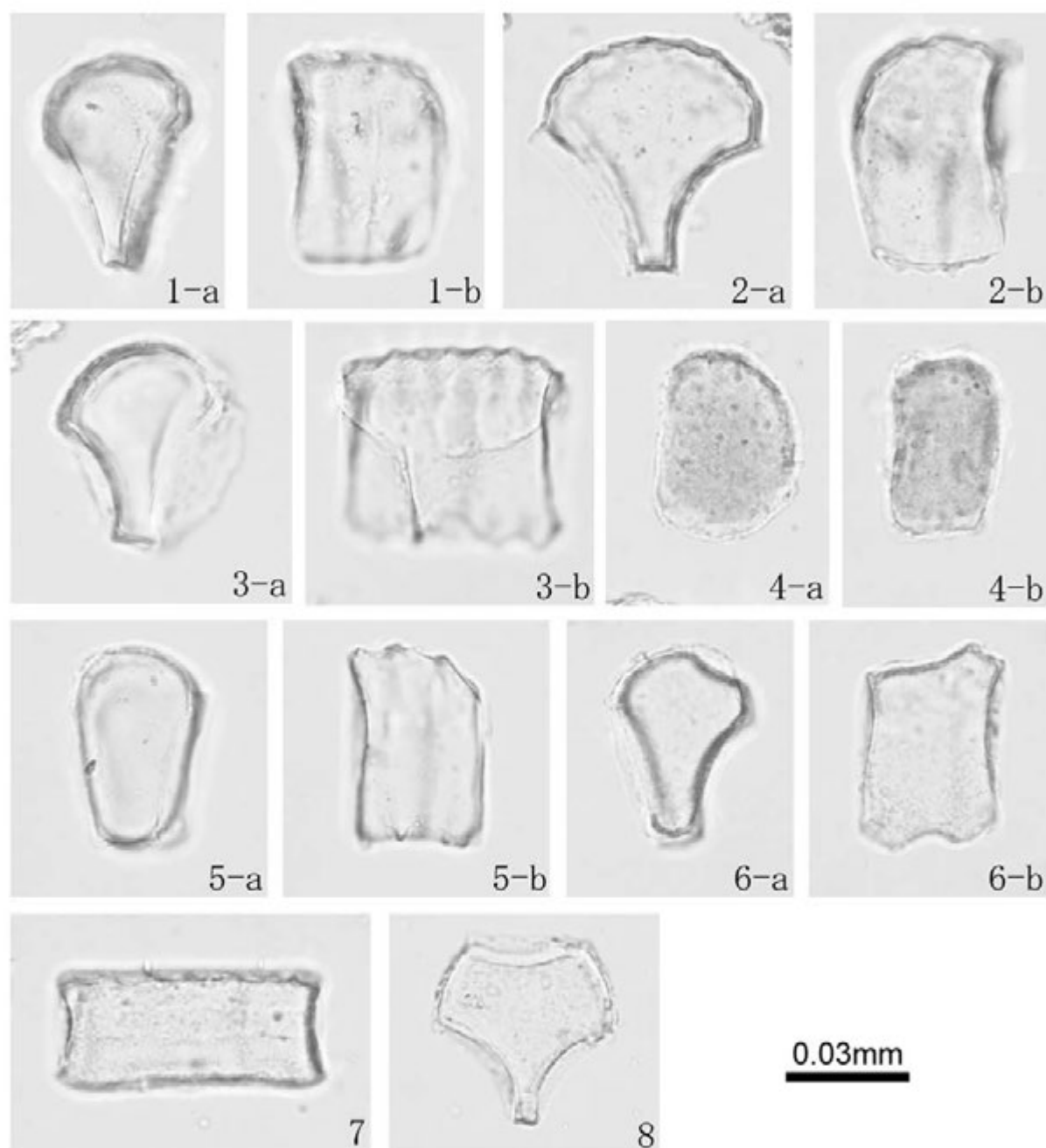
畠跡の是非について，溝状遺構と関係の無い壁面試料3においてもイネのプラント・オパールが検出されており，キビ族も多く観察されている。このように溝状遺構内試料と関係ない壁面試料とに大きな違いは認められず，分析結果のみから溝状遺構が畠跡であるかないかは判断できないと考える。

しかしながら上記したようにイネあるいはキビ族の栽培が考えられることから，その可能性は高いと思われる。なお稲作についてはこの分析からのみで畠作か水田耕作か区別することはできず，花粉分析による水田雑草類の有無などにより判断されよう。

株式会社 パレオ・ラボ 鈴木 茂

引用文献

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用 - 先史時代の水田址探査 - . 考古学ジャーナル，227，2 - 7 .



図版 堂原遺跡のプラント・オパール

- 1、2 : イネ (a : 断面、b : 側面) 1 : 試料2、2 : 試料3
 3 : ネザサ節型 (a : 断面、b : 側面) 試料3
 4 : クマザサ属型 (a : 断面、b : 側面) 試料1
 5 : 他のタケ亜科 (a : 断面、b : 側面) 試料3
 6 : ウシクサ族 (a : 断面、b : 側面) 試料2
 7 : キビ族 (側面) 試料1
 8 : シバ属 (断面) 試料3

第Ⅴ章 発掘調査のまとめ

堂原遺跡の発掘調査は、第3地点において縄文時代早期、第2地点において古代～中世と、場所によって時代が異なる調査となった。

縄文時代の様相

縄文時代早期の遺構は、A・B-18～22区で、集石3基、炉跡4基が検出され、台地の縁辺部が生活空間として利用されている。各集石の確認層位は、集石3がa層上面、集石1・2及び炉跡がb層である。集石2号は礫にまとまりがあり、掘り込みを有するのに対し、集石1・3号は、礫の数が少なく出土状況もまばらで、焼土跡、炭化物を伴わないことから、破碎礫の廃棄によって形成された可能性もある。なお、集石に使用する礫は、台地下を流れる浦谷川で採取したものと考えられる。

本県において、掘り込みをもつ炉跡の検出は珍しい事例である。炉跡は集石1・2と共に、台地の落ち際に沿って配置されている。両者は、確認面が同じであるため、同時期に共存して使用された可能性がある。

出土遺物は、土器、石器共に少ない。土器は前平式土器と桑ノ丸式土器が主体で、他の土器型式は出土数が少なく、帰属層位等が判然としない。第4表に示したように、前平式土器は、P14（薩摩火山灰）直上のb層からP13を含むc層にかけて、桑ノ丸式土器はP11とP13に挟まれたa層を中心に出土している。このような土器型式と層位の対応関係は、これまでの調査事例と概ね整合しており、このことから、検出された遺構は、集石1・2、炉跡が前平式土器、集石3が桑ノ丸式土器に伴うものと考えられる。

本遺跡は、水源に近く、集石の礫を採取し易い台地の縁辺部に形成された、前平式土器と桑ノ丸式土器の時期を中心とするキャンプサイトであると推測される。

古代～中世の様相

古代～中世の包含層は部分的に削平されていたが、第1・2地点のb層で道跡58条、土坑1基、溝状遺構17条を検出した。

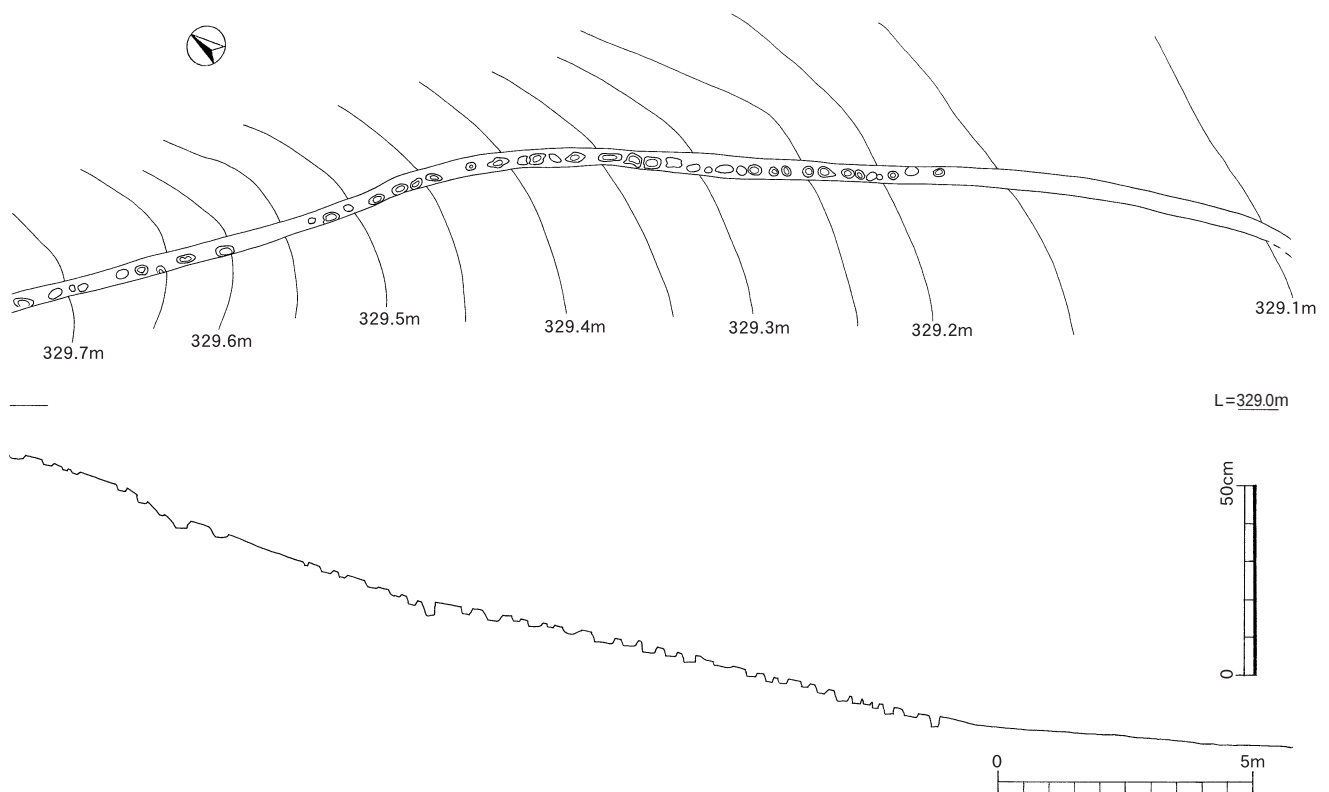
道跡は、b層で出土した土師器から9世紀頃に形成され始めたと考えられる。大きく3群に集約でき、いずれも北西-南東の方向へ、ほぼ並行して検出された。北西方向は現在の檜久保集落、南東方向は台地下に流れる大鳥川（平房川）へと続いている。道跡の重なりが多いことから、長期にわたり利用していたと考えられる。

道跡に伴い、等間隔に連続したほぼ同径の楕円形を呈する窪みが多数検出された。波板状痕跡と呼ばれるこの凹凸面は、古墳時代から近世前半までと長期にわたって存在する遺構であり、全国的に広く分布している。その起因について、東和幸氏は4県12遺跡32例の波板状凹凸面を検証し、その芯々距離（60cm～70cm）が当時の牛や馬の歩幅とほぼ合致すること、さらには現在の牛や馬についても、牧場で同様の痕跡が確認されていることから、牛馬歩行痕説を指摘している¹⁾。また、

飯田充晴氏は凹部分の埋土状況を踏まえながら、当時の道路構築行程を想定する中で、上面（路面）を永く維持する目的と強度を安定させるため、意図的に凹凸面を施工した路床構築痕説を指摘している²⁾。さらに、北郷泰道氏による重量物の運搬を目的にした枕木痕説や³⁾、近江俊秀氏による、を包括した複合機能説など⁴⁾、これまで様々な説が唱えられている。本遺跡で検出された波板状痕跡については、その芯々距離の平均値が67cm程度に収まること、形状や埋土状況が、の説とは異なることから、東氏の説に該当するものと考えられる。

波板状痕跡はB - 2 ~ 5区、BC - 6 ~ 8区に集中しており、BC - 9 ~ 13区においては、ほとんど確認できなかった（図 - 20）。地形と照合すると、集中する区域では傾斜がやや強くなっており、それ以外は緩やかな傾斜であることが分かる。道跡4でも、傾斜が続く地形では波板状痕跡が確認できるが、平坦な地形では痕跡が確認できないのが分かる（図 - 36）。これらの事実から、牛馬が斜面で足をより踏ん張るために痕跡が強く残った可能性が考えられる。

しかし、窪みの深さについては0.6cm ~ 3.7cmとばらつきがあり、傾斜の強弱による違いは見られないことから、流水による地盤の緩み等も含め、今後さらに検証する必要がある。



第36図 道跡4傾斜状況（上 1 : 150, 下縦 1 : 10, 下横 1 : 150）

B C - 10～12区では、道跡から10cm程下位（層上面）で、溝状遺構を南北方向に10条検出した。同方向へ伸びる群に属する道跡との関連は確認できなかったため、道跡とは異なる溝状遺構と判断した。関連の出土遺物から古代（9世紀）の遺構であると考えられるが、遺物の出土量が少なかったため道跡との具体的な時期差については不明である。

溝上遺構の特徴として、溝の幅は約80cm程度で約90～100cmの間隔に並んでいたため、畝跡の可能性を考えて調査を進めていった。土壌のプラント・オパール分析を行った結果、イネあるいはキビ族の栽培が行われていた可能性はあるものの、溝状遺構内で採取した試料1・2の分析結果にバラツキがあり、さらに比較試料として採取した壁面試料との間に明確な差異がないことから、畝跡とは断定できなかった。また、B - 8，9区から4条，B - 13区から3条，道跡を横切るように溝状遺構が検出されたが、いずれも硬化面がなく，遺物も伴わなかった。

遺物はほとんど出土せず，土師器が層下部で数点出土したのみであることから，本遺跡は，水源を求めて行き来を行った交通の要衝であると推測される。

註

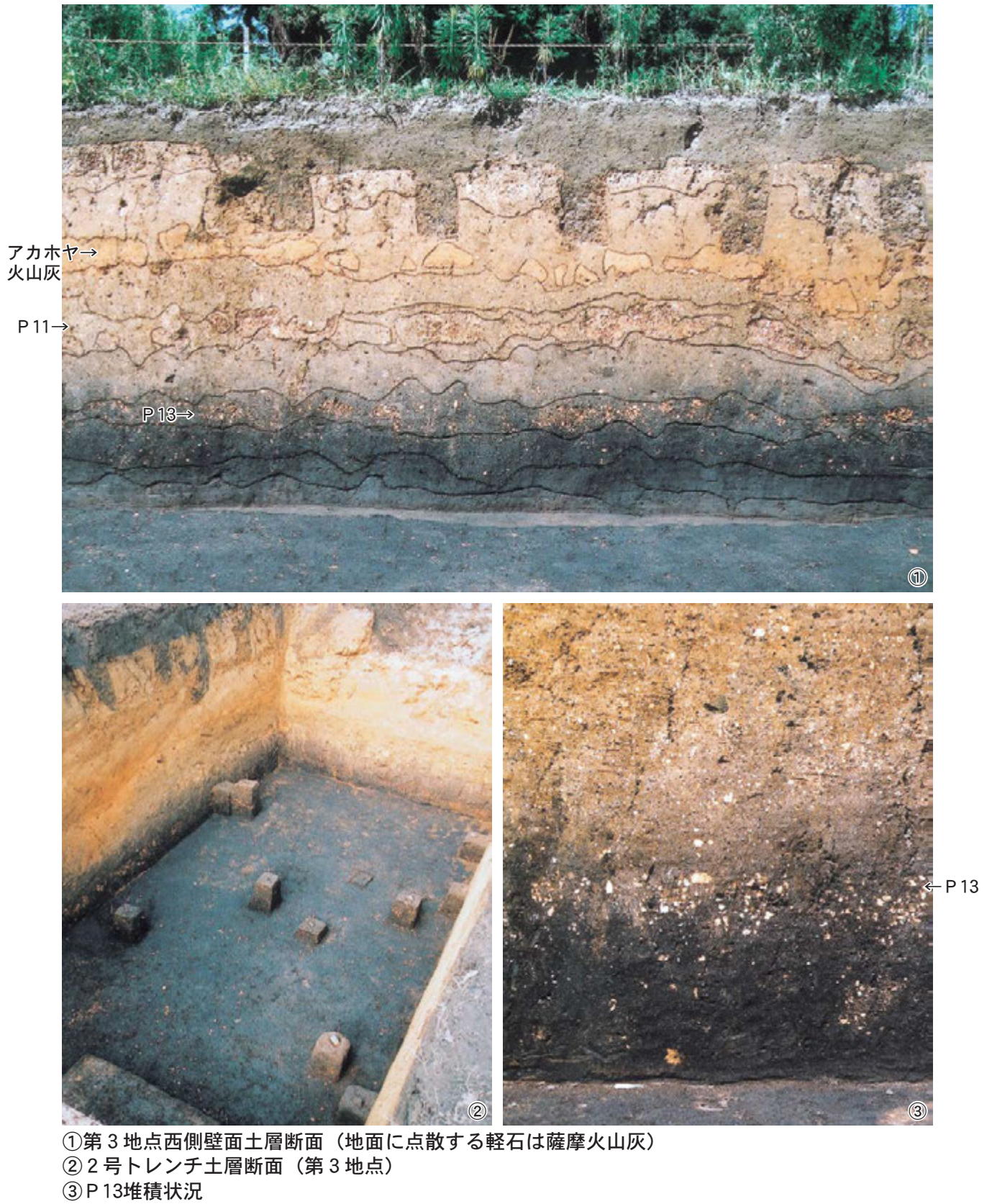
- 1) 東 和幸 2003「波板状凹凸面牛馬歩行痕説再論」『研究紀要縄文の森から』1号
- 2) 飯田 充晴 1993「道路構造方法について - 埼玉県所沢市東の上遺跡の道路跡を中心にして - 」『古代交通研究第2号』
- 3) 北郷 泰道 1987「東大寺紅梁と日向 - 神話化の構造 - 」『えとのす』32号
- 4) 近江 俊秀 2000「道路遺構の変遷」『古代交通研究』第10号

写 真 图 版



調査区全景

図版 2





①・② A B - 20, 21区Ⅷ層・Ⅸa層遺物出土状況
③・④Ⅸa層土器出土状況 ⑤・⑥Ⅸa層石器出土状況

図版 4



① A B - 20・21区 IXb・X層遺物出土状況

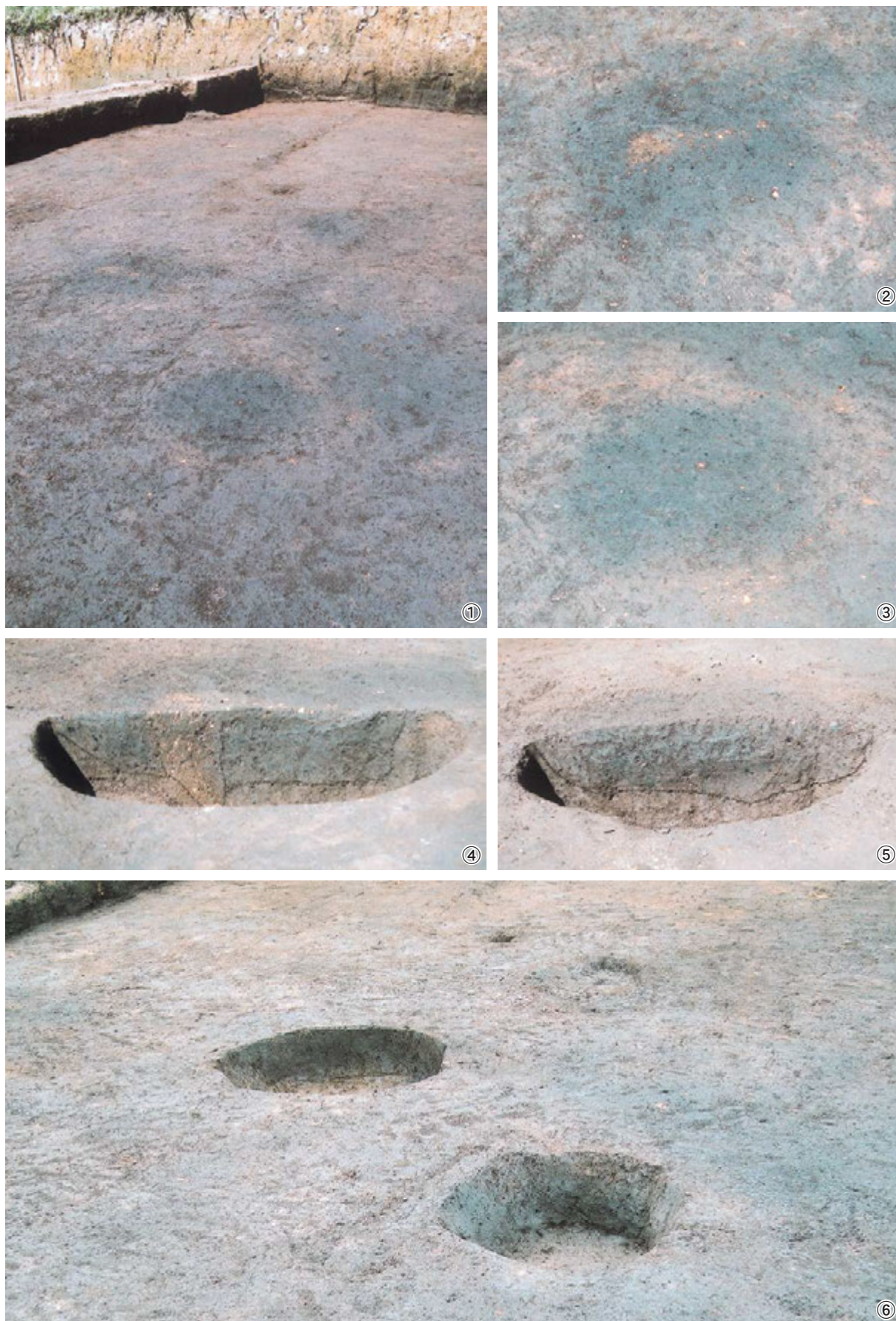
②～④ IXb・X層出土遺物

⑤ 先行トレンチ 1 調査状況



①集石 1 号 ②集石 2 号 ③集石 3 号

図版 6



①炉跡 1 ~ 3 検出状況 ②炉跡 2 検出状況 ③炉跡 3 検出状況
 ④炉跡 2 土層断面 ⑤炉跡 3 土層断面 ⑥炉跡 1 ~ 3 完掘状況



①第 2 地点西側土層断面 ② P 1 堆積状況 ③第 1 地点道跡・遺物出土状況

図版 8



① B C - 9 ~ 12区溝状遺構群検出状況 ② B C - 9 ~ 12区溝状遺構群完掘状況



①道跡Ⅰ群（BC－2～7区）検出状況 ②硬化面（BC－2～4区）検出状況

图版10



①道跡Ⅱ群(B-6~8区)波板状痕迹検出状況 ②道跡Ⅱ群(B-6~8区)波板状痕迹完掘状況
③道跡15波板状痕迹 ④道跡15断面状况(1) ⑤道跡15断面状况(2)



①道跡Ⅲ群（BC-9, 10区）検出状況
④道跡Ⅱ群（BC-11, 12区）検出状況

②道跡54断面状況
⑤道跡34断面状況

③道跡56断面状況
⑥道跡35断面状況

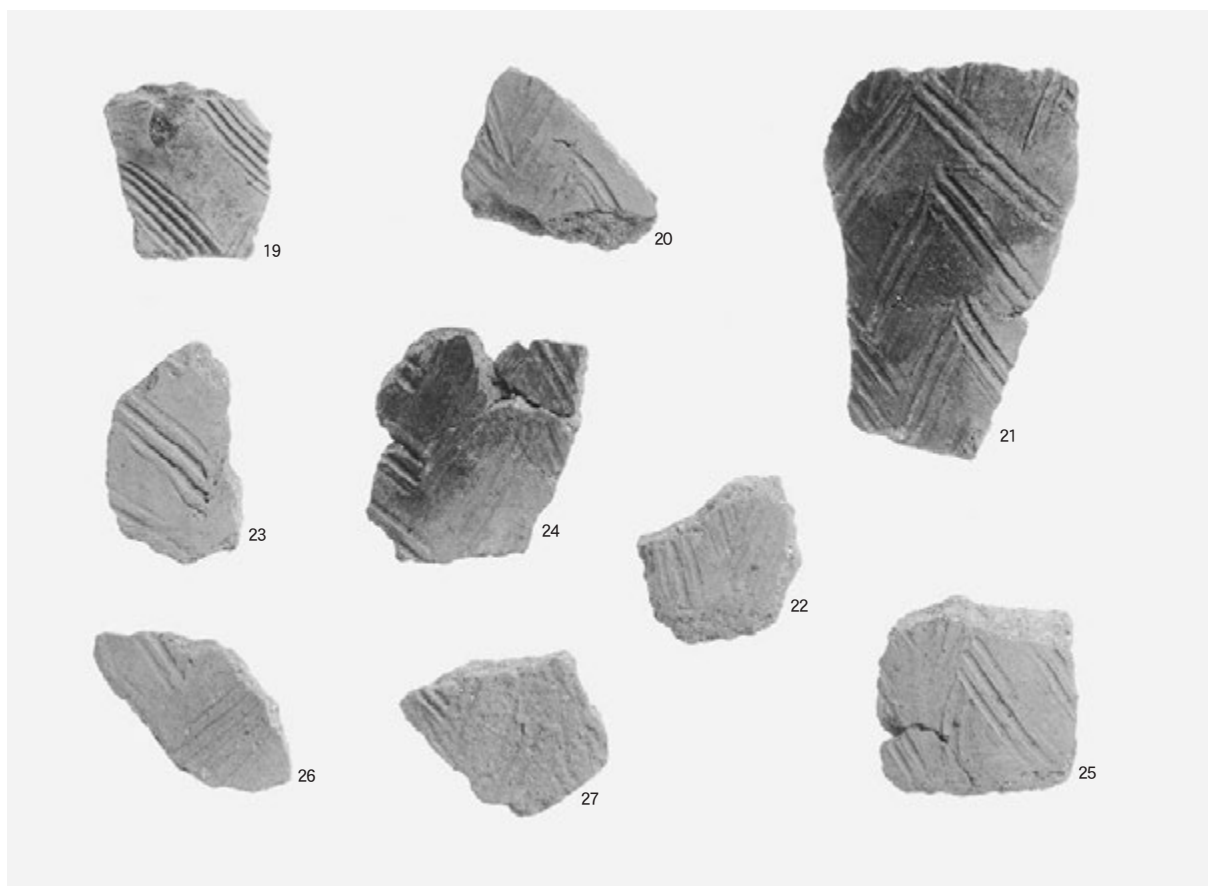
図版12



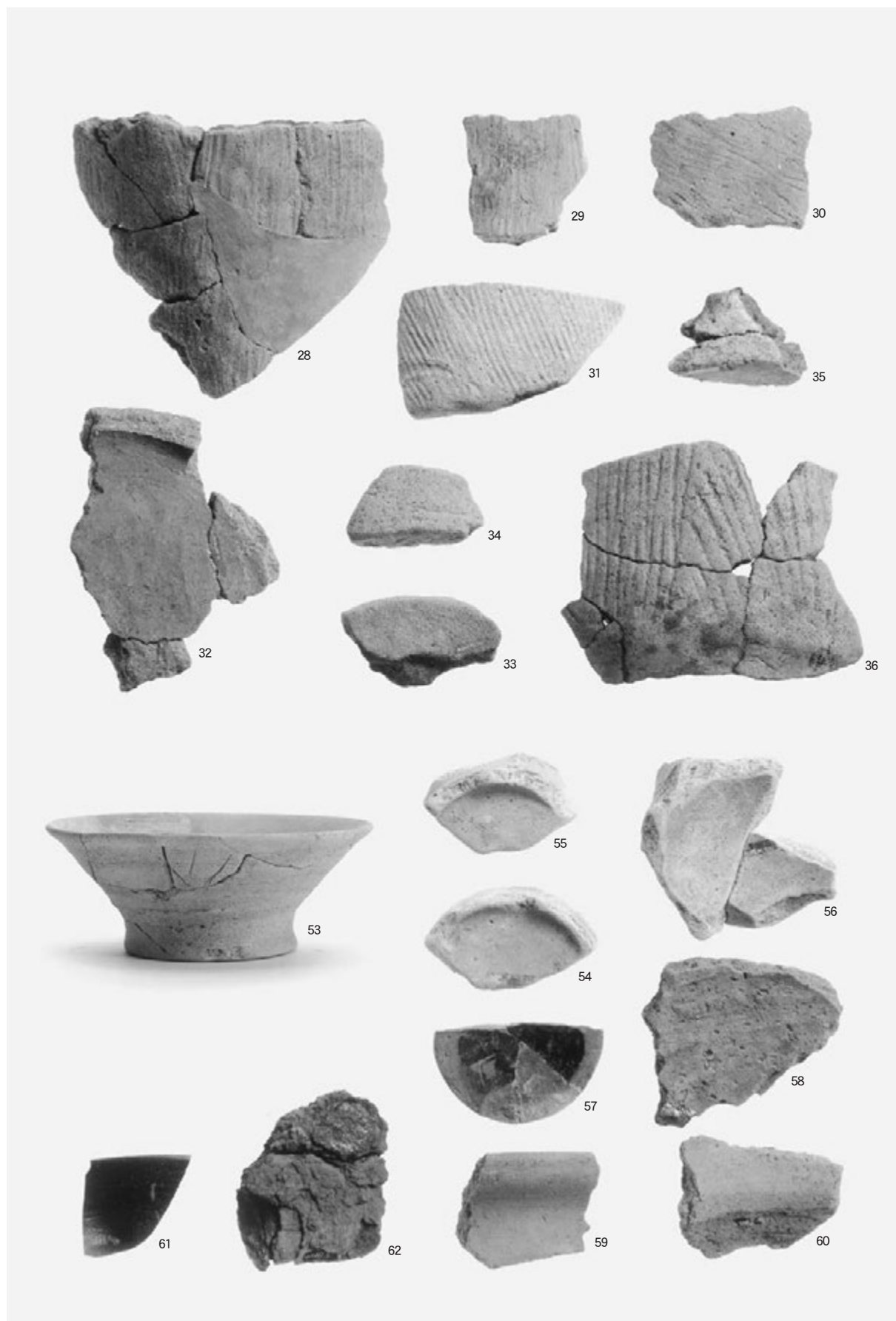
①調査風景(1) ②調査風景(2) ③市成中学校社会科見学の様子
④百引小学校家庭教育学級の様子 ⑤発掘調査に携わった方々



縄文時代早期土器 1 (1～17)

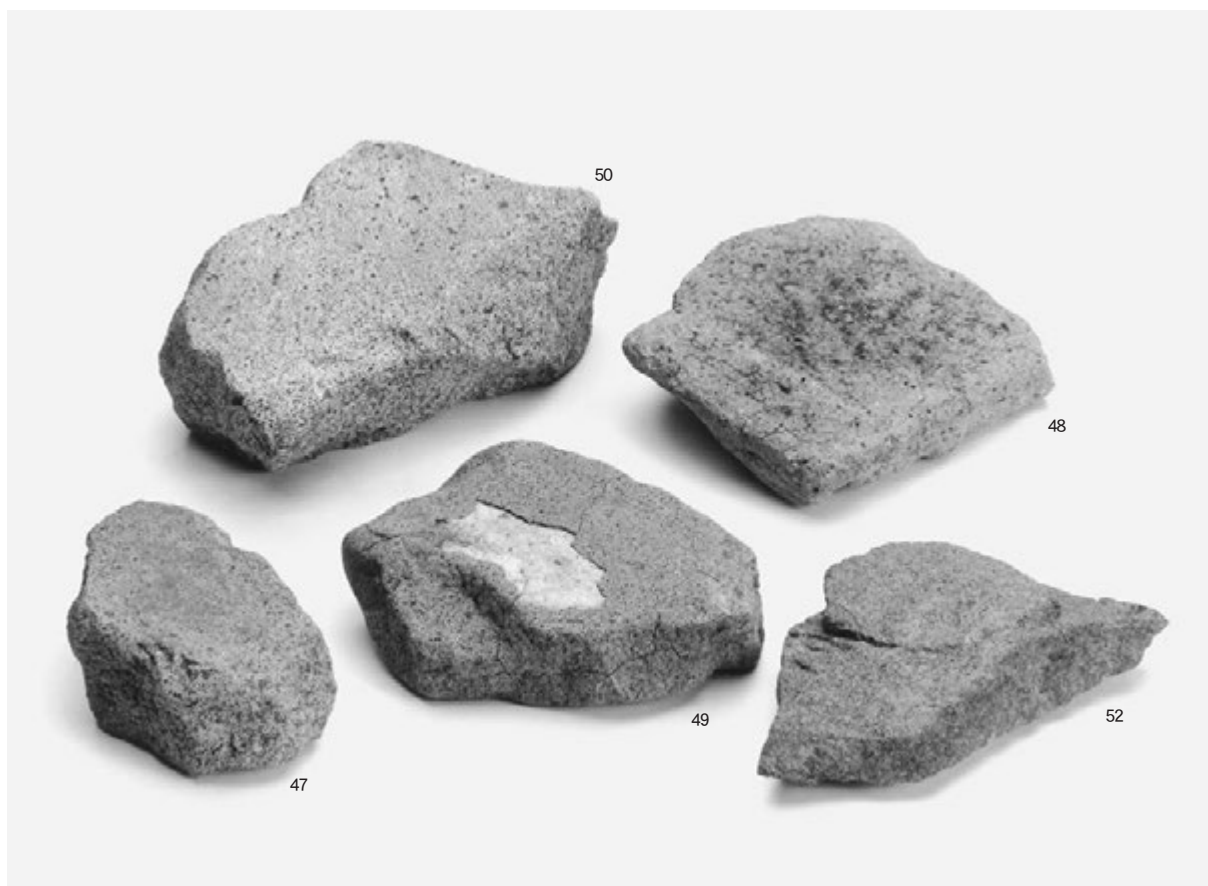
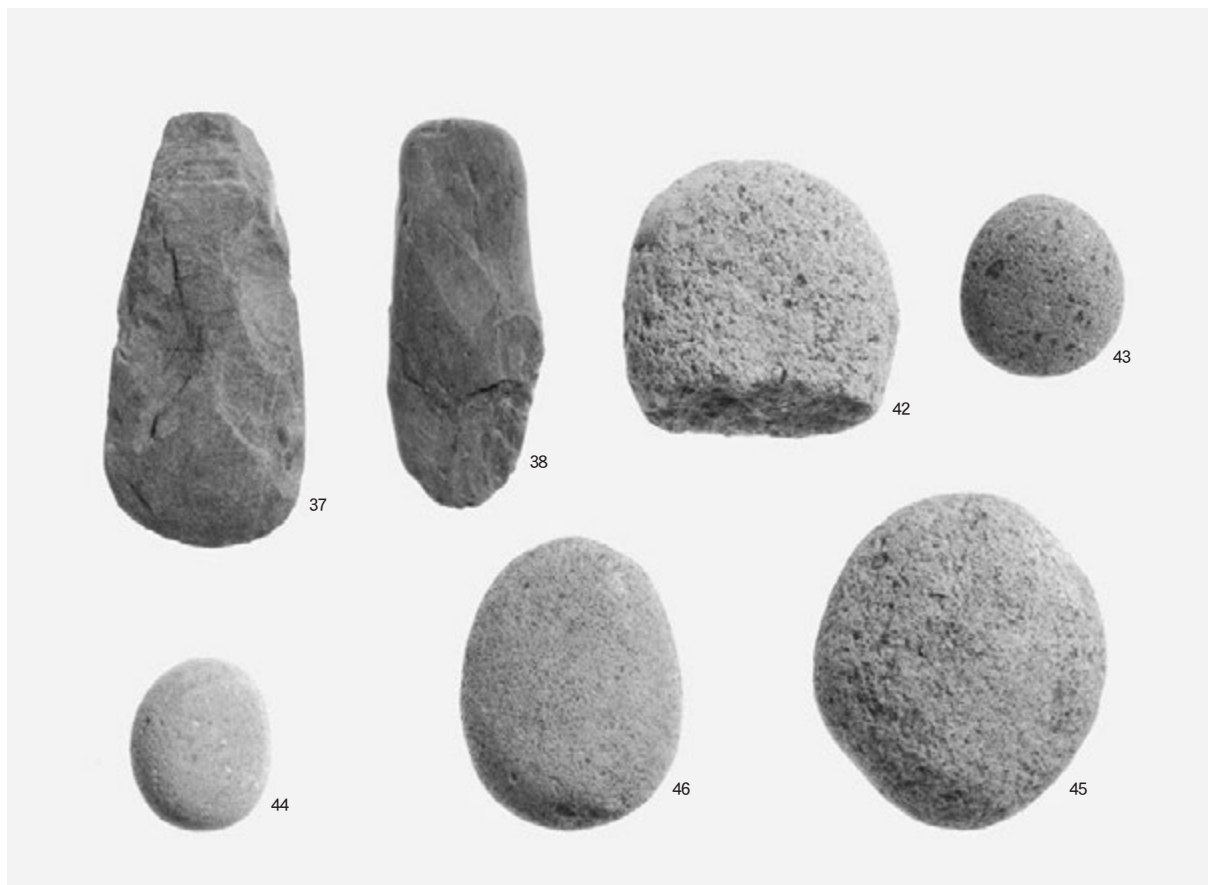


縄文時代早期土器 2 (18~27)



縄文時代早期土器 3 (28～36), 古代・中世土師器 (53～62)

図版16



縄文時代早期石器

あ と が き

堂原遺跡の発掘調査は、梅雨から盛夏にかけて3か月間、一番体力が消耗する時期に行われた。本センターに勤務して初めての調査である。初めて見る道具、初めて聞いた言葉……。

そして、何もかもが初めての中で、数々の驚きに出会うこととなる。古代・中世の道跡遺構の調査においては、大地を幾度も踏みしめてできた自然道の埋土を除去しながら下部に硬化面を検出したとき、まるでアスファルトのようなその硬さに驚いた。

縄文時代の調査においては、時代の位置付けとなる火山灰層の見事な重なりに驚いた。さらに教科書でしか見たことのない土器の小片を手に取り、作業員さんとともに驚き喜んだ。

幸いなことに、報告書作成も担当することになった。整理作業を進めていく中で、調査当時のことをなかなか思い出せず苦労したり、「こういう調査をしておけばよかった」と、何度も悔やんだりした。四苦八苦しながら何とか終わることができた今、次回調査を行う際の留意点をしっかりと押さえておくべきであると反省している。

最後に、発掘作業や整理作業に御協力していただいた作業員の方々をはじめ、懇切丁寧な御指導いただいた多くの関係者の方々には心から感謝しております。

皆様、本当にありがとうございました。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（145）
国道504号改良工事（百引拡幅）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

堂 原 遺 跡

発行日 2009年3月

発行者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL（0995）48-5811

印刷所 株式会社あすなろ印刷
〒899-0041 鹿児島市城西2-2-36
TEL（099）214-3757